モンゴル帝国と朝鮮半島

2019 年度 インターゼミ アジアダイナミズム班

学部生

杉浦左京、藤山拓海、和泉遼、押見正明、小出幹、柳沢悠介

大学院生

宮北靖也、半田敏章、越田辰宏、小西令枝、北山智子、
野々宮正晃、浅賀誠

卒業生

光永和弘、塚原啓弘、和泉昌宏、三好瑛太

指導教員

金美徳、水盛涼一、小林昭菜

目次

はじめに 9

第１章　高麗の政治・経済史 10

第１節　高麗の国家運営 10

第１項　王国維持のための柔軟性 10

第２項　王国維持のための知恵 11

第２節　高麗の文化におけるモンゴル帝国の影響 13

第１項　元代の中国（漢人）文化の受容と発展 15

第２項　モンゴル文字（パスパ）文字との関連性についての仮説 16

第３項　モンゴル食文化の朝鮮半島への影響 17

第３節　高麗の経済 19

第１項　税制 19

第２項　貨幣制度と貿易 19

第４節　高麗王朝の実態 21

第１項　古朝鮮の自立 21

第２項　モンゴルとの一体化 22

第３項　繰り返される内部闘争 23

第４項　国家の運営から見る成功と失敗 23

第５節　朝鮮と日本のアイデンティティ 24

第２章　モンゴル帝国時代（元）の中国 25

第１節　モンゴル帝国のアイデンティティ 26

第２節　元朝の官僚 28

第１項　漢人役人とは 28

第２項　役割 28

第３項　結論 29

第３節　モンゴル帝国の都・北京 29

第１項　問題提起 29

第２項　「大都」遷都の経緯 29

第３項　大都遷都の意図 30

第４項　なぜ大都（北京）だったのか 32

第５項　元衰退後のモンゴル帝国の影響 33

第４節　少数民族モンゴル族による漢民族支配 34

第１項　元朝下のモンゴル第一主義の身分制度 34

第２項　元朝下における漢民族抑圧はなかった 35
第３章　モンゴル帝国以降（明・清・現代）の中国 37
第１節　大清帝国における少数民族満州族の漢民族支配 37
第１項　八旗制・官僚制度における漢民族の扱い 37
第２項　漢民族への強硬策 39
第３項　漢民族への融和策 40
第２節　少数民族による漢民族支配～モンゴル帝国と大清帝国の共通点～ 40
第３節　漢民族による現代中国の多様な中華民族統治 43
第４節　少数民族による統治と現代日本企業 44
第５節　モンゴル帝国滅亡後の北東アジア 46
第１項　高麗国の親明派と親元派 46
第１項　歴史上の分岐点 47
第６節　清（満州人）によるモンゴル統治 48
第７節　モンゴル帝国の統治と一帯一路政策 50
結論 53
最後に 58
参考文献 59
2019 年アジアダイナミズム班年間スケジュール 62
フィールドワーク報告 63
概要 63
スケジュール 63
参加者（敬称略） 63
報告 64
（ア）　元寇資料館 64
（イ）　筥崎宮 64
（ウ）　福岡市博物館 65
（エ）　九州大学伊都キャンパス 65
（オ）　九州国立博物館 67
まとめ 67
最終発表スライド 67
謝辞 83

執筆担当 84

図表目次

図 1　ムスリム商人の主な貿易路 21
図 2　紀元前３世紀～１世紀の朝鮮半島 21
図 3　レイヤー化されたアイデンティティ　筆者作成 27
図 4　チンギス・カーン家系図 31
図 5　中国の物資輸送を示した図 32
図 6　明朝の領土 33
図 7　大清帝国の版図 37
図 8　大清帝国の支配体制 39
図 9 42
図 10 42
図 11　チベット自治区・新疆ウイグル自治区 44
図 12　親会社が事業を営むグループ経営　筆者作成 44
図 13　純粋持株会社によるグループ経営　筆者作成 45
図 14　2019 年 6 月 16 日のデモ 52
図 15　中華帝国の政体（2017 年多摩大学ｲﾝﾀｰｾﾞﾐ論文） 53
図 16　8 月 26 日　元寇資料館にて　撮影　水盛先生 64
図 17　8 月 26 日宮崎宮にて　水盛先生撮影 64
図 18　九州大学伊都キャンパスにて　水盛先生撮影 66

表 1　モンゴル第一主義の身分制度　筆者作成 35
表 2　関係国の政治制度 54
表 3　高麗、李氏朝鮮時代の政治制度 55
表 4　戦後の韓国の政治制度[共和制] 55
表 5　最近のフランスの政治制度 56
表 6　フランスと朝鮮半島との政体比較 57
表 7　モンゴル帝国の盛衰要因：統治・経済と経営 57
表 8　モンゴル帝国に関する歴史評価と経営評価 58
表 9　年間スケジュール　筆者作成 62

はじめに

挑戦や失敗を絶えず繰り返しながら、人や組織は長い時間をかけて時代の変化に柔軟に対応し進化を遂げてきた。世界の歴史を振り返れば、ここ数百年で特に人類は急速に発展し、世界人口も増加の一方をたどっている。一方で、人や組織は自らの安定や資源の確保、自己顕示欲、そして怨恨怨念の対象として常に争いを繰り返し、地方レベルから世界レベルに至る各々のスケールで栄枯盛衰を繰り返してきた。グローバル化した現代世界でもなお紛争が続く地域があるが、力と力の衝突だけで問題解決に至るわけではない。人類の生活の維持や発展のためには平和が必要であり、武力ではなく対話を通じてお互いの立場を理解し合い問題解決を図ることが最も有効的であると考える。

実際、現代の国際情勢はいよいよ複雑である。アメリカのトランプ大統領は自国第一主義を唱えナショナリズムを助長するとともに貿易赤字の解消や移民に対する差別的な政策をとり、存在感を増す中国との間で熾烈な貿易戦争を繰り広げ、互いに関税を付加し続けている。韓国は日本とのあいだで徴用工や慰安婦に関する議論を繰り広げ、北朝鮮は体制維持を確保し経済制裁を解消するため飛翔体と核施設を材料にアメリカと対等な交渉を行うべくしたたかな行動に出ている。そして国民レベルでは、双方が互いを理不尽で会話の成立しない相手国と考え、インターネット上などで国民感情の膨張を助長している。

2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」では、国際社会全体が人間活動に起因する諸問題を喫緊の課題として認識し、協働して解決に向けて取り組んで行く決意を表明している。その決意表明の基本理念は「だれ一人取り残さない(NO One Left Behind)」という言葉に集約されるが、その背景にはグローバル化による成長の恩恵から取り残された地域の極端な貧困や地域間経済格差を解決せねば持続可能な成長は実現不可能という認識がある。とはいえ、価値観の異なる対象を理解するためには、自国の尺度のみでは全く不十分であり、対象の歴史や価値観そして感情、さらにはそこから発生する行動理念について、対象の立場からの確認が必要である。世界が平和でなければ持続可能な未来を作ることなどできるはずもない。

我々日本人は、戦後の歴史教育の過程で、米国の影響を大きく受けており、どうしても米国寄りの視界で物事を捉えてしまうが、１つの視界から歴史を捉らえるのではなく、多角的・多元的な視界で歴史を捉え、全体知を持って、物事の本質を判断できる力が求められている。

このような文脈において、我々アジアダイナミズム班は過去の大帝国モンゴルに注目した。現在のモンゴルは、まさに現代世界の中心に位置するアメリカでも中国でもない。しかし過去のモンゴル帝国は、ユーラシア大陸への展開により、東西世界を繋ぐ基点となった画期的な存在であった。そこで 2017 年には手始めにモンゴル帝国史の視界から世界を捉えるため、「モンゴル帝国のユーラシア興隆史」と題して、モンゴル帝国の興隆要因について研究成果をまとめた。また 2018 年は、2017 年のモンゴル帝国の興隆の要因について残された課題を深化すると共に、なぜユーラシア大陸に最大判図を張り巡らせた巨大帝国が衰退の道を辿ったのか、また後世に目に見える影響力を及ぼしていないのかという問題

意識を持って、衰退の要因について 700 年という時間軸を通して研究を進めた。そして今年度 2019 年には、過去 2 年の調査を踏まえ、モンゴル帝国の派遣下における世界秩序を研究しつつある。具体的には、モンゴル時代の朝鮮半島および中国の歴史に焦点を当て、時代や環境の変化の中で組織を維持するため為政者がどう行動したのか、具体的例から見通したものである。しかも当時の大陸との政治関係や文化の受容は現代社会にも影響を与えるものとなっていった。そしてこれは最終的には現在の大韓民国や北朝鮮の言動にも関係するものとなっているのである。こうして各国の歴史的観点から本質的に捉え、国際関係での行動を模索することを視野に入れ、さらには私たち自身のこれからの生き方、働き方、歴史認識、時代認識、組織運営、そして日本人としてのアジア・世界との向き合い方の指針にしていきたいと考えている。

第 1 章　高麗の政治・経済史

第 1 節　高麗の国家運営

第 1 項　王国維持のための柔軟性

高麗は 918 年に豪族王建（ワンゴン）により建国され朝鮮半島の覇権を確立し、10 世紀末から 11 世紀初にかけては契丹の侵攻を受けながらも国家を築き上げた。周辺国に対しては朝貢使節を派遣して臣属を表明し、王位の承認を受けるなど大国に事えながらも、自らも天命を受けた天子であり東方の天下を統治するという強い野望を持っていたとされる。1206 年にチンギス・カーンがモンゴル皇帝に即位し、高麗の隣国である金に対し大規模な戦争を仕掛けた過程で、金に属する一部の者がモンゴルの追撃を受け高麗に逃れてきた。その際、高麗政府はモンゴル軍と共同で契丹集団を制圧したことをきっかけに、これまでモンゴルの侵入を受け続け抵抗してきた方針を転換しモンゴルとの講和交渉を開始したが、モンゴル使者の高圧的な態度や繰り返される貢物要求により、高麗のモンゴルへの不満が高まり再び両国間の緊張状態へ発展した。1225 年に高麗内でモンゴルの使者が不慮の死を遂げたことをきっかけにモンゴルは高麗に対し不信感をもち両国間の交渉が途絶した後、1231 年からモンゴルは高麗への侵攻を繰り返し、両国が和平交渉に入るまで 29 年を要した。最初の侵攻時に高麗はモンゴルに対し一旦は降伏するものの、モンゴルから派遣された監視官（ダルガチ）を殺害し抵抗を開始した。高麗はモンゴルとの徹底抗戦を決意し江華島に都を移すなど山城や海島に退避しながら地形をうまく利用してモンゴルに抗戦し、水戦に弱いモンゴル軍の弱点を見抜いた戦略によりに戦争を進めた。江華島に移った高麗政府は、朝鮮半島南部地域の穀倉地帯からの水上輸送による物資を調達していた。モンゴル軍は江華島に映った高麗政府を攻略しきることはできなかったものの高麗各地を略奪や侵攻を繰り返し、朝鮮半島内にいすわるようにもなった。一方でモンゴルがどこまで高麗政府を屈服させようとした意識があったかは不明であるが、高麗に対する圧迫を強める一方で、国王の出頭や王太子の出頭を条件として講和の選択肢を残すなど、対話での解決の道を残す方法をモンゴルは高麗側に提示していたとされる。当時の崔氏政権が担っていた高麗政府の求心力

は低下していた中、モンゴルとの講和が有益とする勢力による宮廷クーデターによって政権が打倒され、モンゴルに対する抗戦責任を崔氏政権に押し付ける形で新しい高麗政府が立ち上がり、モンゴルとの講和に舵を切った。

国家がモンゴルの侵入により危機的な状況の中で、周辺国との関係を築きながら国を維持していく方針に舵をきる柔軟さを高麗は持ち合わせていたと考えられる。一方、高麗内部では絶えず様々な考え方のぶつかり合いが起きており、権力闘争さえ発生していた。結果として高麗全体としては国を維持するための方策を選択するに至るのであるが、国に不利益な道を選択するような内部の権力者がいたことも明らかであり、しかしながら方向転換を図り国の枠組みを維持し続ける実現力を持ち合わせていた。

第２項　王国維持のための知恵

次に反モンゴル体制からの変換を図りモンゴルとの講和に踏み込むことを決めた高麗王国の知恵を駆使した主体的な国家運営について考えてみたい。

1259 年、高麗の王太子倎（のちの元宗）は、父高宗の名代として、病没したモンゴル皇帝憲宗モンケの後に権力を手にしたクビライ・カーンと対面した。クビライ・カーンは長年屈服しなかった高麗の太子が来投したことを「率先帰服」した大功とみなしたとされる。ほどなく高麗の高宗が死去すると、クビライ・カーンは太子倎を高麗に向かわせるが、高麗が離反することのないように倎への待遇を改善した上で新国王として承認し、護衛をつけて帰国させた。高麗において倎が即位すると、この元宗政権に対しクビライ・カーンは穏便な姿勢で望んだ。しかしながら、モンゴル内での権力闘争に勝利しクビライ政権が安定すると、クビライ・カーンの高麗に対する姿勢が硬化し、遷都の実行や服従国の定例義務を求めるようになった。高麗の元宗は王としてクビライ・カーンが収める中国・元に出向くなど関係維持に積極的であったが、反モンゴル派である勢力との間で対立が深まり、クビライ・カーンの要求を履行しきらない状況が続いたことにより、クビライ・カーンは高麗に対する不信感を強めた。

要求履行が滞っていた高麗を従えるため、クビライ・カーンは高麗が命令に従うように通告することを目的に、日本に対する朝貢勧告することを高麗政府に担当させた。これにはクビライ・カーン収める元と日本との関係性を作る目的の他に、モンゴルが当時進めていた南宋攻略の際に、南宋と日本が協力関係にならないように牽制するねらいもあったものとされる。クビライ・カーンは高麗政府の抵抗を予想し、前提として命令不履行は許可しないと方針を伝えていたが、高麗政府は予想通り抵抗を示したため、再度高麗の責任で元の国書を日本に届けることを要求した。これらの高麗の消極的な対応は元側の不信感を増幅させた。

一方で高麗では、モンゴル派である元宗と部下の林衍により、反モンゴル派の金俊を殺害するに至ったが、金俊の後釜となった林衍が上長である元宗と対立し、王を廃止して王弟を擁立することとなった。元にとっては公認した国王を無断で無くされることは、元の存在をないがしろにすることであり、これを反抗としていた。クビライ・カーンとしては高麗に強硬策に出て敵対することにより、元が攻勢を強めていた南宋と高麗の距離が近づく危険性を考慮して、その対応に柔軟性を持たせる必要があった。そこでクビライ・カーンは元宗の

長子であるのちの忠烈王に地位と軍を授け、林衍討伐を要請した。林衍は元の圧力により元宗を復位させると元宗は釈明のために元におもむき、一方で林衍は病死に至った。林衍の地位はその子に引き継がれたが、元宗の帰国とともに元の大軍が高麗に入り、クーデターの末に林衍の子は殺害された。その結果、約１世紀にわたり高麗で権力を握り続けた武臣政権は終わりを告げ、王政復古が実現し、元との協調姿勢に転じるに至った。
その後の高麗は元の属国としての道を歩んでいった。元宗の長子である忠烈王は、元との関係改善を図る一手として公主降嫁を要請し元はそれを受け入れた。モンゴルは、自らの帝国を築くにあたり多くの国を制服していたが、各々の地域においては、言語や宗教を許容するといった自律性を保持させ、分権的な連合体・複合体として帝国を形成していった。高麗もその一つとしてあり続けた。

元宗の子である忠烈王はモンゴル帝室との通婚関係により駙馬（ふば）となったが、直ちに元の貴族として扱われることはなく、元朝政府の組下の外国君主として処遇されていた。忠烈王は交渉を経て「駙馬高麗国王」という称号を得ることになり、モンゴル駙馬として一体化することで、元の官人に対して優位に立つことになった。高麗王は以降代々、モンゴルからの公主降嫁を受け続けることになる。高麗王に対する元朝宮廷での待遇は向上し、また帝室の姻戚となったことで、それまで課されてきた年例の歳貢が廃止され、逆に皇帝から歳賜を受けるようになった。また高麗王の元に高麗王府とその断事官が置かれ、モンゴルの皇帝や諸王が保有する親衛隊ケシク（宿衛）と同様の組織が置かれることとなった。
1280 年代半ば頃には元の行省制度が大きく変わり、元は１１行省からなる地方統治機関を統括する最高地方統治期間となった。その中で、日本侵略の際に征東行省がおかれたが、その長官にあたる地位には歴代高麗王を世襲させた。元の傘下で二つの地位を兼任させるという高い位置付けとなった。征東行省は元の一般人事の対象外とされ、高麗王の推薦を元朝政府が承認する形であったことから、人事権も保有し、高麗政府内のみに任用だけでなく、漢人・非漢人の元朝人士を任用することもあり、政治的人脈が国外にも広がっていた。高麗王家や個々の王族は元の覇権下でも、モンゴル帝国の中で成長した子弟が世代を超えて首長の座を継承することで、元に対し貢献かつ忠誠を示しつつ、自らに有利な政治的環境を獲得した。

服従国には監視官の派遣など数々の要求をしたモンゴルだが、このような高麗の姿勢を考慮し、典型的な征服地支配策を適用するには至らない限定的な要求に留める中で関係構築がなされていた。また高麗が王朝体制を維持していく上で、クビライ・カーンが高麗の在来体制の維持を承認した「不快土風」の原則も大きな意味を持ち、繰り返し二国間で確認されたことも高麗王朝の維持に寄与された。

さらに高麗王朝は、元が日本に戦争を仕掛けた際に日本の反抗に備え鎮辺万戸府という前進基地を高麗に設置した際に、帝国東辺防衛として対日警戒網を統括する役割を自ら引き受けた。元の日本戦略の一翼を高麗が担うことで、高麗が元に対し自己主張できる立場になったことが、高麗王の地位を擁護することにも繋がった。

元が高麗に対し恒常的な徴税を行わなかったのは、高麗王朝を存続させることでその軍事協力を得て、労さずして東方辺境の平穏をはかるべきであると考えられ、両国に相互利益

があったからである。元にとって日本は将来帰服させるべき敵性勢力であったが、元自らが日本に対する東辺の備えというリスクを追うのではなく、その役割を高麗王朝に果たさせるためにその体制を保全させた。高麗としても、適性勢力である日本に対する東辺の備えという立場や、モンゴル駙馬にしてかつ独自の君主である関係を元との間に構築することで、自らに有利な生存環境をめざしてその立場を勝ち取り、元から優遇される立場を維持した知恵があった。

第２節　高麗の文化におけるモンゴル帝国の影響

高麗（918～1392）は韓半島の後三国を統一し、渤海の移民を受入れ韓民族を一つに統一した国家であった。高麗は仏教を精神生活の理念とし、儒学を国家秩序の理念に掲げて、中央集権的な貴族官僚国家として発展した。高麗の 475 年間は東アジアの覇権をかけて、韓民族と北方の胡族や西方の漢族が互いに争った時期であった。高麗のみならず中国も契丹、女真、モンゴル等の北方胡族によって軍事的、政治的圧迫を受け苦しんだ。高麗もこうした侵略勢力に対抗し、国家としての独自性を維持しながら、自主的な民族文化を創造する激動の歴史を展開することとなる。

一方、李氏朝鮮時代は高麗時代と異なり、儒教的王道政治の実現を目指して儒学を学問的に理解する能力を重視した中央集権的な両班官僚国家として発展することとなる。

高麗の太祖は後三国を統一した後、国の統合の手段として各地に定着していた仏教を利用し、新しい文化意識を生み出そうとした。仏教が伝統文化と結びついた儀礼によって庶民を動かす力を持っていると考えたからである。太祖王建は、後代の王へ訓要十条を遺し、仏教行事として春には燃灯会、秋には八関会を国家的行事として伝えている。

また日本との交易として公式な外交を結ぶ前から民間レベルでの交易を行っていたが、11 世紀中葉に日本の外交使節が高麗を訪れたことで交易が拡大した。主に対馬が拠点として中心的な役割を担ったが、
対馬島主に高麗朝廷が特別な官職を与えて保護し、金州の客館で貿易を行わせた。しかし、日本側の荘園領主が富を蓄えるため、多くの商人を高麗に派遣するようになると高麗側は進奉船を 1 回 2 隻に制限した。日本との交易は武臣政権時代も続いたが、高麗末期に倭寇が活発化すると途絶えることとなる。

武臣政権時代は、武臣が門閥貴族に対し軍事クーデターにより実権を握った高麗時代の時代区分である。太祖王建以来の門閥貴族は自身の特権を我がものとし個人的な権力基盤を強化することで特権を維持しようとしたので、高麗国内の社会的問題は改善されなかった。そのため政権を奪った武臣の間で権力闘争が起こり、武臣時代の最初の 26 年間で 4 回も政権が交替するという混乱した状況が続いた。

こうした高麗国内の混乱状況は強大な三別抄と呼ばれる私兵団を有する崔氏一族の崔忠献(チェチュンホン)が政権を握ったことで政局は安定化した。崔氏は自らが門閥である高位の武臣出身であり、それまでの下級武臣出身とは違い、新しい政治機構を作り、抵抗勢力と民衆反乱を容赦なく鎮圧し、国王の廃位、擁立も行った。崔氏政権は 1258 年まで 4

代、62 年間続くこととなった。同じ頃、日本においても源頼朝が日本最初の武家政権である鎌倉幕府を建てている。

騎馬部隊を中心に西南アジアを制圧し世界的な大帝国を築いたモンゴルは、中国をも平定し国号を元と改め、首都を北京に遷都しこの時代に東アジアへの侵略を積極的に進めていった。高麗とモンゴルとの初期の関わりは、1219 年に契丹を平定するため共同作戦を提案したことである。モンゴルが軍事的に高麗を支援したことで高麗に対し、重い貢物を要求したがこれに高麗が不快感を示したため不和が生じた。

両国関係が緊張した際、モンゴルの外交使節が帰国の途上、鴨緑江で殺害される事件があり、モンゴルはこれを高麗の仕業として、1231 年に高麗国内へ攻め込み、首都開京を越えて南下し、残虐の限りを尽くした。高麗は大きな被害を受けたが崔氏政権の実権を握る崔瑀は、海戦に弱いモンゴルの騎兵に対し、山城や島での戦いで対抗し、1232 年、漢江（ハンガン）河口の江華島へ遷都して長期戦の態勢を整えた。江華島へ遷都した後、韓半島全域では、中央の支援のないまま僧兵や郷吏、農民が戦闘を主導した。その中で酷い略奪が行われ、1019 年に作られた符印寺の「初離大蔵経」などの貴重な文化遺産も失われることとなった。モンゴルの高麗遠征は熾烈を極めた。特に 1254 年の第 6 回の遠征では、「蒙古兵に虜えられし男女無慮二〇万六千八百余人、殺戮されし者は計えるに耐えうべからず。経る所の州郡みな灰燼となる。」また、「兵荒以来、骸骨野をおおう」（『高麗史』）といわれた。なお、このとき高麗の朝廷が江華島に逃れ、モンゴルの攻撃に耐えたことは、江華島が朝鮮にとって大切な場所であることが判る。

1967 年に発表された井上靖氏の歴史小説『風濤(ふうとう)』は、モンゴルに服属させられた高麗王元宗の苦悩を描いている。小説という形態をとっているが、『高麗史』からモンゴルや高麗の国書を引用し、史実を踏まえて高麗側の苦悩の歴史を精緻に描いており、当時の状況を知る上で参考となる。

その後、モンゴルは高麗に対して、1231 年から 1254 年まで、６回にわたり遠征軍を送って征服しようとした。しかし、高麗で崔氏政権が倒れ、和平派が台頭、1260 年ハン位についたフビライ＝ハンも武力での制圧策を捨て高麗国王として封じた。モンゴルと高麗は講和したが、高麗は形式上、他のモンゴルに屈服した国々とは違い、独立国の地位を維持するが、実質的には属国であり、以降 90 年間モンゴルの影響が衰退するまで属国として様々な政治的、文化的干渉を受け続けた。例えば高麗王室のモンゴルとの通婚や、高麗の皇太子を元の首都である北京に人質として住まわせたり、国王に関連した称号、高麗国内の官制も縮小を余儀なくされ半植民地の様な屈辱的状況におかれた。また領土的にも韓半島の東北部や済州島をモンゴルの直轄として割譲したり、金銀、人参、薬剤、陶磁器等の高麗の特産物の毎年の献上を義務付けられたりした。講和に反対した軍事勢力が 1270 年に三別抄の乱を起こし、珍島や済州島で 1273 年まで抵抗を続けた。1274 年に元の日本遠征（元寇）がはじまると、高麗は属国としてその兵員を出すことを強いられたため大きな負担となり国力は衰退した。元の日本遠征は、鎌倉幕府の御家人の活躍と、第 2 回遠征おける暴風雨のために失敗し、高麗軍も大きな犠牲を出し終了した。

モンゴル支配下の高麗において、戦火で失われた高麗版大蔵経の復興や、金属活字の発明、高麗青磁の発達などの高麗国内での文化の成長があったことが注目され、その後の李氏朝鮮時代にも受け継がれていくこととなる。

14 世紀に入ると、東アジア情勢が大きく変動し、モンゴルの中国王朝、元の漢民族支配に対する農民反乱である紅巾の乱が起こり、その混乱の中から 1368 年に朱元璋が明を建国した。日本においても鎌倉幕府が 1333 年に滅亡して、南北朝の動乱という混乱期に入ったことを背景に、東アジア海岸一帯に倭寇といわれる海賊行為が頻発するようになり、高麗はその被害に大いに悩まされたが、それを撃退する力が無くなるほど国力は弱まっていた。国内が元への忠誠を続けようとする親元派と、明に協力しようとする親明派に分裂した為でもあった。そのような中、1392 年に倭寇撃退に功績のあった李成桂が高麗王室を倒し李氏朝鮮を建国することとなった。隣国の日本では 1368 年に足利義満が将軍となり 1392 年に南北朝の合一に至っている。

第１項　元代の中国（漢人）文化の受容と発展

これまでモンゴルは暴虐な征服者というイメージが先行し、漢文化に対しても冷淡で、元王朝中国では漢文化は成長や発展を阻害されたと言われてきた。しかし、これは誤った認識であり、実際はモンゴルの統治下のもと、伝統的な士大夫（地主、文化人）文化は更なる発展を遂げ、新たな庶民文化も生まれるなど、漢人文化は他の時代に劣らない隆盛を迎えたのである。庶民文化では、宗に始まり、元で完成した「雑劇」（元曲）がこの時代を代表する文芸として上げられる。主な作品は『西廂記』、『漢宮秋』が代表的である。

多民族を支配した国家であった元は、漢族以外の人物が伝統的な士大夫（中国の北宋以降で、科挙官僚・地主・文人の三者を兼ね備えた者）文化の担い手となった点も注目される。

中でも雑劇の一種「散曲」作者として知られるウイグル人の貫雲石、優れた漢詩を残したオングト族の馬祖常、ムスリムの薩都剌、優れた書家であったカンクリ族の康里巎巎(キキ)などが有名である。勿論、漢族として文学に名を馳せた者も数多く、宋の皇室の血を引き、元に仕えた趙孟頫は、漢詩、書、画のいずれにも優れていた。山西省の永楽宮に描かれている壁画は元代の最高傑作である。

モンゴルが中国文化を軽視したという根拠によく上げられるのが従来、儒教の低調であると言われた。「九儒十丐(きゅうじゅじっきゅう)」という言葉があるが、元代の職業のランクをあげる際に、第一は官、第二に吏、第三に僧、最下位は、丐（物貰い、乞食）であり、儒家はその一つ前の第九に位置付けられる程蔑まれたということを示している。しかし、この語の出典の一つは「鉄函心史」であり、著者は南宋の忠臣、鄭思肖という元来、モンゴルに対し敵愾心を持つ人物であったので、そのまま真実を表している書物であったか疑問が残る。

実際には元朝は歴代王朝の中でも特に儒教を保護し興隆させた王朝であった。孔子の出身地、曲阜において、孔家が代々孔子を祀ってきた宣聖廟は金末の動乱で消失してしまったが、金朝滅亡後、オゴデイによって孔子の子孫の孔元措を衍聖公(えんせいこう)に封

じ、孔家の復興を行った。また、南宋で起こった儒教の一派、朱子学は既にクビライの時代に学問として最重視し、元の中国支配が終わるまでに行われた 16 回の科挙においても、準拠すべき経書解釈として認定し、国家教学として発展していった。東アジアにおける朱子学の隆盛は元代に起源があるといってもよいだろう。

元の時代はモンゴル帝国によるユーラシア全域の支配に伴って、東西文化の交流が進んだ時代であった。西方の科学技術が中国にもたらされたことは特筆するし、特に天文学、暦学の分野は顕著である。元朝は中国全国に二十数カ所の天体観測所を設けさせた。中でも河南省に現存する観星台は有名で、郭守敬(かくしゅけい)がクビライの命により建設されたものである。

モンゴル人の征服王朝である元王朝ではモンゴル人第一主義がとられ、当初は科挙を実施しなかった。1276 年の南宋の滅亡とともに中国の長い伝統であった科挙はいったん中断されることとなった。科挙が行われなくなったため、宋以来の士大夫は没落した。なお元朝も次第に漢文化に傾斜していったため、仁宗のときの 1315 年に初めて科挙を実施、その後も何回かは実施された。しかし漢人で合格者（進士）となるものはごく少数であった。完全な科挙の復活は次の明代を待たなければならない。

第２項　モンゴル文字（パスパ）文字との関連性についての仮説

「ハングル」は、李氏朝鮮王朝第 4 大王の世宗（セジョン）が民衆のために制定した文字とされている。一方、「パスパ文字」は、モンゴル帝国の大元ウルスの国師であったチベット仏教の僧侶・パスパがフビライ・ハンの命を受けて制定した文字で、自国の言語を漢字で記録することが困難なため、表音文字を別に作ったとされている。

韓国の代表的な書誌学者である高麗大学のチョン・グァン名誉教授（76）は 30 日、 嘉泉（カチョン）大学で開かれる「ユーラシア文明とアルタイ」国際学術大会において、同内容の論文を発表した。チョン教授が発表する論文「アルタイ諸民族の文字制定と使用」によると、まず、ハングルとパスパ文字の文字数が同じであるという。ハングルは子音 32 文字と母音 11 文字の計 43 文字であり、これはパスパ文字の 43 字母と一致しよく似ている。

また、チベットを統一したソンツェン・ガンポ王が古代インドで流行した音声・文法理論である毘伽羅論を応用して新たな表音文字を作り出した影響を受け、7、8 世紀以降、中国の北方民族たちは新国家を建国し、それに伴い新たな文字を制定する伝統があったという。膠着的な文法構造を持ったアルタイ系統の言語を使用する民族にとって、漢字は自分たちの言語を表記するのに適していないからだ。このような伝統が朝鮮半島にも伝わり、朝鮮の建国とともにハングルの制定につながったというのが、チョン教授の主張だ。チョン教授は、「毘伽羅論は、仏教記録を通じて朝鮮にも伝わった」「麗末鮮初期の多くの学僧らが学んでいたため、これがハングル制定の基本的な枠組みになった」のではと述べた。

チョン教授は、朝鮮を開国した太祖・李成桂の家系とパスパ文字のつながりについても指摘している。彼の父親である李子春は元に帰属しており、一時期は千戸の官職も務めた

とされている。このことから、李子春のひ孫である世宗が文字を制定するにあたり、パスパ文字の影響が大きかったのではという仮説を紹介した。

さらにチョン教授は、訓民正音がパスパ文字のように漢字音を自国語で表記するために制定された文字であると主張し、「初めは漢字音の表音のために記号を作ったが、パスパ文字のように韓国語と韓国の漢字音の表記にも使われ、急速に一般民衆の生活文字として広まった」のではと述べた。

パスパ文字は発明から 100 年間ほどしか使われなかったが、チベットでは 1642 年に発足したガンデンポタン政権のもとで、ダライ・ラマがチベット・ハルハ・オイラトなどの諸国のモンゴル人王公たちに称号を授与する際、印章に称号を刻むための文字として採用された。モンゴル帝国の大元ウルスで国師であったチベット仏教のラマ、パスパ（パクパ）が、クビライ・ハーンの命を受けて、大元ウルス下の全ての言語を表記するための共用国字として作成した。 従来、モンゴル語表記に使用していたウイグル文字（ウイグル式モンゴル文字）は、モンゴル語の音を全て表記するためには不完全であり、大元ウルスが支配下に置いた地域で広く用いられている中国語のような全く異なった音韻体系を持つ言語に使用を広げるのは非実用的であった。また、元より先に華北に存在した遼や金も独自の文字を持っていた。このため、元のクビライは、大元ウルス全体で使用するための新しい文字の設計をパスパに命じた。パスパは、叔父のサキャ・パンディタが考案した文字を元に、モンゴル語や中国語などを包含するようにチベット文字（悉曇文字や現行のデーヴァナーガリーと同じくブラフミー文字の系列）を拡張した。1269 年（至元 6 年）3 月、パスパが作成した文字は元の国字として公布された。パスパの没後、テムル、カイシャンの時代、軟母音、後置字、再置字などのパスパ文字の細部の仕上げがされた。 この成果としての 38 字は、その形状に基づき「方形文字」などとも呼ばれるが、今日一般的には「パスパ文字」として知られている。元朝時代にはパスパ文字は、「蒙古字」ないし「蒙古新字」と称されていた。

字体の起源が、横書きのチベット文字にあるにもかかわらず、以前のウイグル文字や漢字と同様に縦書きであり、かつウイグル文字と同じく左から右へ書かれる。元朝の公的文書や碑文には、中国語をパスパ文字で表記したものも残されているが、全て漢字併記の形として書かれている。縦書きで漢字との併記になじみやすいという利点もあるが、声調を区別できない表記法であるため、意味の誤解を生みやすく、単独での使用には堪えなかったためである。しかし、モンゴル人などが漢字を学習する場合には、およその読みが分かって効率を高める働きがあった。また、通常の楷書体の他に、画数を増大させた篆書体も存在し、印章などにも使用されていた。

第３項　モンゴル食文化の朝鮮半島への影響

1260 年モンゴルと和睦を結んでから高麗との人的経済的交流は活発となり、元帝国の飲食文化も自然と韓半島へ伝わることとなる。1368 年に元朝が滅亡するまで、様々な階層が他国の文化を韓半島へ伝えることとなる。モンゴル人のみならずモンゴル帝国の色目人官員、イスラム商人、漢人も含まれる。

高麗初期から高麗朝廷は牧畜を奨励し、馬は戦闘用、運搬の手段として利用され、牛は主に農耕に利用され相対的に牛馬の食用の比重は低かったものと考えられる。特に高麗時代は仏教が隆盛し、何度も屠殺禁止令が出され、成宗期には肉食を禁じる勅令まで下された。ところが 1260 年のモンゴルと高麗の和睦が成立して以降は、高麗地域での肉食文化は拡大の様子を呈している。『高麗史』を記した史家は、忠烈王の后妃である斉国大長公主が母の訃報に接して号泣した際も以前と変わらず肉食を摂取したと伝わっている。モンゴル大カンは、モンゴルと高麗が和親を結んで以来、高麗王に羊を下賜することもあった。1263 年、クビライは元宗に調書や 500 頭の羊を送り、元宗はそれを諸王や 5 品以上の官吏に分け与えている。1297 年にも忠烈王の誕生日を迎えて元帝国の太后が羊 50 頭と白鳥 10 匹、またモンゴルの酒を下賜しており、忠烈王の王室が開催した宴会では、酒と羊肉を出して宴会を開いたとする記録がある。このことから、モンゴルとの和親成立以来、モンゴル人の主食であり北中国で多く摂取されていた羊が高麗王室を中心とする支配層の食卓にも上がったと考えられる。ところが、高麗の風土は羊飼育には合わず盛んにはならなかった。このように、高麗後期には上流層を中心に祭祀と宴会などで羊肉や豚肉が使われ、庶民層では、広く飼育されていた鶏や犬が食用されたととらえることができる。

一方で、高麗末の肉食の普及と共に、農作業で活用されていた牛を食用として認識するようになった。モンゴルとの関係が成立する以前の牛肉の食用は、羊肉や豚肉と比べて相対的に少なく、上流層の一部が牛肉を食用したという記録がある。モンゴルと高麗の和親以来、モンゴル朝廷は、牛や白鳥を徴発し貢納するよう命じた。1271 年の元宗期は、モンゴルから農牛 6000 頭を要求されており、高麗に来ていた屯田兵にとっても、牛は農作業のためだけでなく食用としても重要であった。モンゴル帝国の成立以降、モンゴルやその支配に入った各地の諸民族の文化が東アジア地域へ流入した。モンゴルと高麗王室が結びつきを深めてから、王侯、官僚、商人等の身分で高麗へ来訪した人々を通じて、高麗社会の上層部で消費され当時隆盛した仏教文化の影響により、制約されていた牛豚羊といった肉類の摂取は、その後の朝鮮半島の食文化へと普遍化し拡大していったことが分かる。

肉類の普及とともにモンゴル征服以降食されるようになったのが酪と酥である。李氏朝鮮時代の王室では酪粥（牛乳粥）を常膳として王が食したという記録がある。これは現代の朝鮮半島の食文化にものこっている食文化である。酪粥は駝酪粥とも呼ばれたが、古くは遊牧民の駱駝の乳に由来しモンゴルでは駝酪は牛乳を発酵させたヨーグルトの様な発酵食を意味する。朝鮮時代に御貢として王家で摂取しただけでなく、朝鮮上層部でも常食され外国からの使臣が来たときもこれをもてなした。 朝鮮時代に廐牧や牧畜を管轄した司僕寺、内医院などで進封を担当した。朝鮮前期には、駝酪粥のような乳製品を専門的に製造する集団があり、スユチ（酥油赤）と呼ばれた。彼らは、黄海道、平安道にいたモンゴル人らで屠畜業に従事し、朝鮮初期に朝鮮王室へ食事を供給した司饔房に酥油を上納したが、1421 年、朝廷はこれを廃止するよう命じた。このようなスユチ（酥油赤）の存在は、高麗末期から韓半島北部に居住していたモンゴル人だった可能性が高いとされる。また朝鮮初期にモンゴル人が乳製品の製造を専門に担当した事実から、乳製品を主食とするモンゴルの飲食文化が李氏朝鮮の王室にも伝わった。

第３節　高麗の経済

第１項　税制

高麗は元から課税もされず、支援物資をもらっていたという（2016,森平）が、なぜそのような特別扱いをされていたのか。元は高麗を支配することにどのようなメリットがあった、または期待していたのだろうか。

元の時代、高麗との経済交流で、高麗は元から恒常的な徴税を受けていなかった（2016,森平）。直接税である土地税や戸毎の課税に関してはモンゴル帝国ではなく地方に任せていた。これは、1269 年の「計点民戸」の結果が元に報告された形跡がないという点から推測されている。モンゴル帝国という国家では、国が専売していた「塩課」と、商行為に課した「商税」という間接税を基本とした課税体制をとっていた（2004,杉山）。

では、ここで言う商税とは何かというと、それは港湾・渡津（としん）などの流通、物流のポイントで課税していた税であり、最終の売却地において売上税のかたちで政府に納入するという仕組みをとっていた。その税率は 3.3%と非常に小さく、海外との貿易も全てこれが原則になっていた。さらに、この商税は売買においてのみ課税され、通過するだけでは税は必要無かった。インフラとしては街道・ジャムチの整備が大きな影響を持っていた一方、税制としても人の往来がより活発になる施策がとられていたのである。

高麗においてもそれは適用されていたのは間違いないだろう。高麗はもともと金王朝、契丹から繰り返し侵略があり、朝貢しながらも何度も略奪にあっていた。元に降伏したのち、侵略もなくなり、税負担も軽くなれば高麗の民間人、特に商人が恩恵を得たと思われる。言い換えれば、元は高麗に対して意図して課税しなかったわけではなく、もともと支配地域に対する課税自体行っていなかった。結果として、それは高麗にとってメリットになっていたと言うことである。

第２項　貨幣制度と貿易

高麗の貨幣政策は不安定であった。初期の銅銭使用の強制、廃止、さらには紙幣である楮貨の使用なども試みられたが、これらは極めて短期間で改廃され、混乱を助長していた。このような中で貨幣の発行と流通の基本となる政府の信頼そのものが一時、喪失したことが、高麗における銭貨流通を疎外する根本的な要因の一つとなったと考えられる。しかしながら、興味深いのは、貨幣が全く流通しなかったというわけではない。貿易に貨幣を用いる商人、官僚、貴族などのいわゆる支配者層には流通していたのである。他方、彼ら以外の一般民衆は、貨幣ではなく物々交換が中心であったようだ。ここから推測出来ることは、高麗の支配者層と被支配者層は経済活動が分断されていたのではないか、と言うことである。このような歴史の中で、どのような貨幣が使われていたのか。

朝鮮半島で初めて貨幣が発行されたのは 996 年のことであった。それらの貨幣は唐の貨幣「乾元重宝」を模したものや、「乾元重宝」背に「東国」の文字を鋳出した鉄銭であった。998 年になると、唐の「開現通宝」を鋳写を開始しており、現在はこれを「高麗開

元」と呼んでいる。素材としてアンチモニー[1]を多く含む独特の銅銭であった。これらの貨幣は、北方からの契丹の侵入により、鋳造は中止される。

1097 年になると鋳銭司を設置し、貨幣鋳造が再開された。1102 年には海東重宝、海東通宝、東国重宝、東国通宝、韓重宝、三韓通宝の 6 種類の銅貨が発行されていた。しかし、これらの貨幣の発行枚数は少なく、貴族だけの使用にとどまり、市場への流出はほとんどなかった。

朝鮮半島では、19 世紀ごろまでの 1,000 年以上にわたり、布（素材は麻）がそのまま貨幣として絶え間なく使用されてきた。布には政府が取り決めた基準があり、縦糸 5 升（1 升は縦糸 80 本）で長さ 35 尺(1,060.61㎝)が 1 反、2 反で 1 疋であった。また、米が貨幣の代わりとして使用されたこともあった。しかし、布は価値変動が少なかったこと、保存に便利であったことから、布の方が使用頻度は高かった。

王朝末期の 14 世紀には縦糸の数が少なくなり、3 升布、2 升布などが出現した。これらのように縦糸が少なくなると、本来の布としての機能は果たさず、象徴的な貨幣へと変化した。

1101 年になると銀の貨幣「銀瓶」が発行された。価値は 1 斤＝布 100 疋であった。しかし、14 世紀になると銀不足となり、銀瓶のサイズが小さくなった。また、民間では「砕銀」や「標銀」と呼ばれる低品質貨幣が発行され、次第に使用されなくなっていった。

以上のように高麗国内において貨幣はあまり普及してはいなかったが、重要な用途の一つに貿易があった。高麗は、日本や江南等と貿易を行っていた。モンゴル帝国には既にムスリムらが入り込んでいたことから、ムスリムの海洋コミュニティともつながっていたと考えるのが自然であろう。

クビライの時代、南宋を降伏させてからよりはっきりと元が海洋へと進出している傾向が見て取れる。高麗への侵攻もこの海洋進出を想定していたのではないだろうか。もともと高麗が宋と頻繁に貿易をしていたことも元は知っていたことであろう。事実、1293 年には元が水上駅伝を設けて流通の便宜をはかろうとしていた。

[1] アンチモニー：アンチモンとも呼ばれる。銀白色の金属光沢のある硬くて脆い半金属の固体。日本最古の銅銭である富本銭（683 年ごろ）にも、アンチモニーが銅の融解温度を下げ鋳造しやすくするとともに、完成品の強度を高めるために添加されていた。

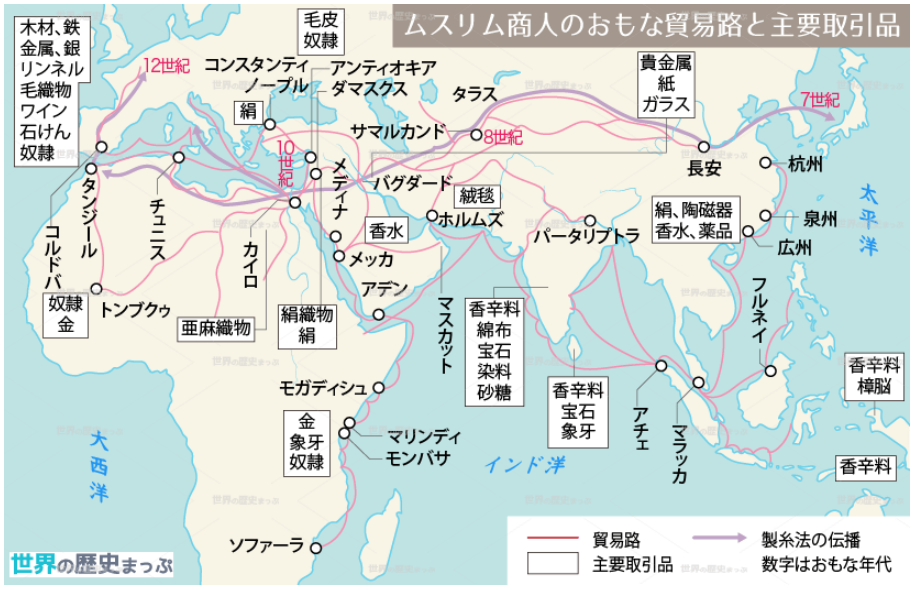


図 1　ムスリム商人の主な貿易路

引用）世界の歴史

< https://www.sekainorekisi.com/world-history/%E6%B5%B7%E3%81%AE%E9%81%93%EF%BC%88%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%88%EF%BC%89/ >

第 4 節　高麗王朝の実態

第 1 項　古朝鮮の自立

国家がまだ成立していなかった紀元前の朝鮮半島は、漢民族からすると未開野蛮な民族であり、当時の漢民族は、この未開な地を支配して教化しなければいけないと考えていたようだ(1972, 井上)。当時の資料は朝鮮半島側のものはまだ発見されておらず、漢民族側の資料でのみ確認する事ができる。漢側の資料によれば、漢民族の支配領域の拡大にともなって朝鮮半島の事情が明らかになってきた。それは紀元前 2 世紀頃のことである。

前 5 世紀には濊族（ウイゾク）と燕が対立していたようだ。このころの成立国家の場所は北朝鮮の学術会、日本の学術会で意見が割れており、遼寧省方面であったとか、北西朝鮮であったなどと言われている。また、北朝鮮の学術会では、その頃、中国よりも早く遼寧省で金属器の生産が始まっていたと言われている(1972, 井上)。

紀元前 2 世紀頃になると、漢に滅ぼされた燕人を中心とし、中国人土着の民族が集まり衛氏朝鮮を設立した。この頃には中国と朝鮮半島との交易が始まっていたと言

図 2　紀元前 3 世紀～1 世紀の朝鮮半島

引用）井上秀雄著「古代朝鮮」

われる。この衛氏朝鮮の支配者である衛満の孫である右渠（ウゴ）王は漢の武帝と争い殺された(1969,李)。

1 世紀頃になると、鴨緑江中上流一帯に暮らしていた住民集団が大きくなり高句麗が建国される。この流域は海抜 1,000m を超える山々が連なり、満州の大平原と明らかに異なる環境であった。この高句麗は朝鮮半島を広く支配し、中国、満州方面へも大きく領土を拡大していくことになるが、この高句麗が建国された環境は独自の文化基盤の構築と無関係ではないだろう(2012,篠原訳)。

後漢時代になると、遼東を支配した公孫度が楽浪郡を復興し、朝鮮半島への影響力が強まった。東方の高句麗を牽制するために、南朝鮮、韓族、濊族（ウイゾク）を支配しようとしたのではないかと言われている。

後漢末のいわゆる三国時代になると、魏・呉の争いに巻き込まれていく。呉が、魏の後ろを牽制するために遼東の公孫淵・高句麗と手を結んだ。この後、魏が遼東の公孫淵を激しく攻撃すると公孫淵は呉と手を切った。一方、高句麗は魏が公孫淵を攻めるにあたり魏に援軍を送っている。

しかし、公孫淵が滅びたのち、高句麗は遼東の支配を求めてしばしば侵略を繰り返していた。ついに魏が母丘倹（カンキュウケン）を派遣し、高句麗の王都をおとした。しかしこのとき東川王は単身逃げ延びており、結果として高句麗は王都を落とされながらも再起し存続できたのである。

こうして朝鮮半島の各地方住民集団は互いに争いながらも諸外国からの侵略に抗う中で次第に朝鮮半島独自の文化基盤が構築されて行った。この「侵略への抵抗」「文化的基盤」は、そこに住む住民らのアイデンティティとして確立されていき、高麗へ引き継がれていった。このような歴史を踏まえ、モンゴル帝国からの侵略への抵抗の歴史も捉えなければならない。

第２項 モンゴルとの一体化

高麗内部では、モンゴルへの講和派と抗戦派の闘争をへて、主導権をとった講和派の忠烈王がモンゴルに恭順姿勢を示して関係改善をはかる一手を打ち、自らに対する公主降嫁を要請し、元朝政府の組下の外国君主として処遇された。「駙馬高麗国王」という称号を得ることになり、モンゴル駙馬の一体化することで、元の官人に対して優位に立つことになり、以後、高麗王に対する元朝宮廷での待遇は向上した。傲慢に振舞っていたモンゴルの使者や将軍たちも、高麗国王の前では臣例を取らざるを得なくなった。また、元は日本との関係を意識し東辺の備えというリスクを高麗王朝に果たさせたが、高麗王朝は防衛の役割を担うことを自認し主張することで体制を保全させた。高麗が元の傘下で、自らに有利な生存環境をめざしてその立場を勝ち取り、不利益を回避するように利用する巧みな戦略により自らの立場を勝ち取ってきた。忠烈王以降、高麗王は歴代に渡りモンゴルに帰服し、その証としてモンゴルの妃を迎えることにより、高麗を維持させた。

第３項 繰り返される内部闘争

しかしながら、内部の王位継承は複雑な問題を抱えていた。忠烈王ののちに即位した忠宣王は、強圧・独断専行的な政治手法が問題視され、元の指示で退位し再び忠烈王が復位した。忠烈王は側近とともに忠宣王を敵視し追い落としを図ったが、その後の駆け引きの中で忠宣王は元の有力者を味方にモンゴル皇帝の甥を引き入れて高麗内クーデターを起こし、再び覇権を得ることに成功した。しかしそのモンゴル皇帝の甥が死去すると忠宣王は失脚した。このように高麗における王位継承の中では、忠烈王から忠恵王までの各王が一度退位したのち復位するという経過をたどった。

高麗王が元の支配層の一員となった結果、王子が元朝宮廷に所属するようになり、個々の立場で元の特定勢力と深く結びつくようになっていった。それが後に権力争いに利用されたり、逆に元の係争に巻き込まれたりし、地位の浮沈が生じるに至った。

また、高麗政権後の李氏朝鮮においても権力争いがことあるごとに発生し、高麗同様に内部闘争が繰り返された。クビライ・カーンの死後、元は相続争いによる政治の混迷などによって徐々に衰退していった。中国では元に対に対する反乱が相次ぎ、1368 年反乱を主導した朱元璋が明を建国した。高麗は元に侵入されていた国土を回復するとともに、元の後ろ盾をしていた国内の勢力を排除し改革したが、敵対勢力の反発から暗殺されてしまい、時期国王と敵対勢力の対立はさらに激化した。明は元の領域をそのまま継承しようとしたが、高麗はそれに応じず、反対勢力を中心に動員して、勢威を削減しようとした。しかし、明に勝てないと判断した李成桂は引き返し、そのさいの王を殺害した。その後、明への報告ののち、王朝が変わったことから「朝鮮」と国号にした。朝鮮は、1392～1910 年の約 500 年に渡りその体制が維持されたが、建国した初代、文武に秀でていた第３代の太宗、党争を終わらせ各党派に均等な人事を行った第 21 代英祖を以外は、一族内の主導権争いを繰り返し長期に安定することはほとんどなかった。

高麗も朝鮮王朝も有事の際には、「対処療法的」な知恵と学習能により体制を構築するが、政治的対立が交わりあい失脚するに至っている。忠烈王の元に対する立ち回りやその後の朝鮮における部分的な安定政権は、「対処療法」の枠を超えることはなく、政権を維持していくこともできなかった。失敗の最大の要因は、個人の欲をいかに少なくし多くの考え方、価値観を取り入れて行くことが重要な要素になっていることが記述の歴史から見えてくる。

第４項 国家の運営から見る成功と失敗

高麗や朝鮮において内部闘争を繰り返し、王位についた多くの者は短命で終わった。そこには個々の欲や特定の近い考え方の者のみを側近に添えることで、周囲とのベクトルが合わず次第にコンフリクトし物別れになり争いに至っている。現代社会においても一族経営が社会の変化や社員の共感を得られず衰退して行くことや、自社の近い存在に権力を集中させることで組織が盲目的となり、正しい判断ができなくなることや不正に至り、社会的信用を失うことで衰退して行く企業の例も少なからず見受けられる。一方で、体制を安定化させるには多様な考え方を取り入れ、客観的に物事をみることができ、実効性のあるチェック体制が存在していることが必要である。近年の例で言えば企業内の社外取締役の重要性が

改めて注目されていることに重ね合わせることができるように思われる。このように、歴史と照らし合わせてみると現代事情にも類似点があるとも言え、人間は同じ過ちを繰り返す生き物とも考えられる。

他方で高麗における忠烈王や李氏朝鮮における李成桂の歴史を振り返って見ると、環境が大きく変化するとき、また大きな変革を求められるときは、様々な意識を汲み取るよりも、強力なリーダーシップの元、スピードと決断力を持って変化に対応していくことが必要だろう。高麗における忠烈王や高麗から李氏朝鮮に移行する際の李成桂などがそれに当たると考えられる。しかしながら、新しく生まれた組織や急成長成熟した組織が成熟期に入る段階においては、カリスマ性のあるような指導者体制から、前述のような、多様な考え方を受け入れることや実効性のあるチェック体制など、特定する指導者の「個人技」から脱却し、より多くの視点のもとで環境の変化に対応していく体制が必要であろう。その切り替えこそが最も難しく、歴史上においても現代においても繰り返す失敗の共通の原因になっているように見受けられる。

組織の栄枯盛衰はあれ、世の中は常に進化し続けていることを考慮すると、人それぞれには役割がある中で歴史の成功や失敗を全て教訓にできる者はおらず、一定の時期で交代し後続者が改善をすることを繰り返すことが、人間が持続的かつ継続的に向上し活動して行く上で備わっている DNA なのではないかとも考えられる。

第５節　　朝鮮と日本のアイデンティティ

朝鮮半島は、金達寿によれば 2,000 年の間に 3,000 回外敵から侵略されたと言われており、司馬遼太郎によれば 500 回侵略されていると言われている。何れにせよ尋常ではない頻度で外敵から侵略されてきた。それにも関わらず、朝鮮人のアイデンティティは保たれ、独自の文化基盤が脈々と受け継がれてきた。

中にはモンゴル帝国に侵略され、大理国やウイグルのように国体が保てず同化してしまった国もある中で、なぜ当時の高麗ひいては朝鮮半島の朝鮮人たるアイデンティティを維持することが出来たのだろうか。

高麗は世界を知っていた。朝鮮半島は、ユーラシア大陸全体で見れば東の端に位置している。ムスリム商人のネットワークにおいても同様で、やはり東の端であり、ムスリム商人が訪れていたことは事実だが、元との貿易が中心であった。

高麗は、紀元前から続く朝鮮の歴史において、常に外部との関わりを強く意識せざるを得なかった、その関わりによって生きながらえてきたとも言える。先に述べたとおり、高麗の国内は貨幣経済も発展せず、脆弱であったことがうかがえる。また、モンゴル帝国だけでなく、宋、遼、金と常に強国と接してきた。朝貢貿易を中心とした周辺の強国との関わりにおいて、その目的は貢ぐという意味だけでなく、情報収集という側面もあっただろう。使節を送り、その国の状況を把握し、自国の危機に備えるという重要な役割である。結果的に高い情報収集能力を身につけた高麗は生き延びることが出来た要因の一つだろう。つまり、長きにわたり侵略されてきた歴史の中で、抵抗という受動的な行動だけでなく、能動的に情報を

収集し、より積極的に事態を好転させるための行動をしていくことを身につけてきたのである。

一方で高麗を始め朝鮮半島の国々は地域住民の集まりとして起こっており、高麗も例外ではない。高麗のアイデンティティを理解するにあたり、王朝だけでなくそこに暮らす住民のことも検討しなければならない。

モンゴル帝国から侵略を受けたとき、高麗王朝は江華島へ避難し、そこで立て篭り抵抗を続けていた。そのとき、モンゴル帝国軍は朝鮮半島を蹂躙していた。時代は異なるが、高句麗の頃からしばしば同じ構図の状況が発生している。外部からの侵略を受けたとき、常にそこに暮らす地域住民は大きな被害を受けながらも抵抗を続けていた。そのような抵抗の中で、次第に朝鮮半島住民の間に檀君に関する民話が広まりを見せる。

檀君とは、紀元前 2333 年に檀君朝鮮を建国したと言われている人物で、12 世紀頃の歴史書に初めて登場する。この檀君に関する民話のことを檀君神話という。内容は、天帝の庶子である桓雄と人間に化身した熊の女が結ばれ、檀君が産まれた。この檀君が平壌を都として朝鮮が生まれたという神話である。檀君が降臨されたとされる 10/31 は祝祭日となり、1961 年までは檀君紀元と呼ばれる暦が使われていたことから見るように、朝鮮においては檀君への信仰は非常に深い。この檀君神話がモンゴル帝国へ抵抗していた時代に生まれたのは、朝鮮のアイデンティティと何らかの関係性があると見るべきであろう。

翻って、日本のアイデンティティとはどんなものだろうか。フィールドワークで訪れた筥崎宮にて日本のアイデンティティを垣間見た。それは、「敵国降伏」の精神である。「敵国降伏」とは、敵国を降伏させるという意味ではなく、「敵国が我が国の優れた徳の力により、自ずからに靡き、統一される」ことを意味する。平安時代より、当時の天皇であられる醍醐天皇が「敵国降伏」の宸筆を下賜され、以降代々の天皇も下賜されてきたのだと言う。

お互いが理解するためには、どちらがより良いか、という話ではなく、そもそもの歴史が異なり、異なるアイデンティティを持っていることを認識しなくてはならない。朝鮮が外敵に対して抵抗し続けた歴史とするならば、日本の外敵は非常に少なく、抵抗の必要が極めて少なかった歴史なのである。

第２章　モンゴル帝国時代（元）の中国

アジアダイナミズム班では 2017 年度から二年間にわたり、モンゴル帝国の興隆そして衰退の歴史について向き合ってきた。研究を進めていく中で、今まで各々が持ち合わせていた認識と合致するものもあれば、相違点や、新たな発見、視座をも獲得することができた。三年目となった今期は、朝鮮半島との関わりにメインテーマを設定して研究を進めてきたが、本章では過去二年間の研究において出現した「残された課題」について論じていく。

第１節　　モンゴル帝国のアイデンティティ

過去二年間の研究の末に我々アジアダイナミズム班が導き出したひとつの結論として「モンゴル人には愛国心のようなものはなかった。だからこそ、有史以来最大の国家を築くことができた」という、一見矛盾しているように見える結論がある。研究を重ねていく上で、確かにそのような考えは日ごとに強くなっていった。しかしながら、それはあくまで国家（近現代の国家とは、その概念そのものが異なっているであろう）という枠組み、考え方における愛国心についてであって、モンゴル人という民族にフォーカスした議論ではない。そのことを踏まえて、それでは「モンゴル人としてのアイデンティティとは何なのか」という課題が残されることとなった。

モンゴル帝国およびモンゴル人のアイデンティティについて思考を深めていた際、あるひとつの問いが生じた。それは、そもそもモンゴル人とはいったい誰のことを指すのか？ということ、そして何をもってモンゴル（帝国）とするのか、ということである。

チンギス・カーンを初代君主として成立したモンゴル帝国（大モンゴル国）は、国家というよりは人の集まり（ウルス）というニュアンスが強かった。また、チンギスによる統合以前には、大小数多くの集団が割拠しており、必ずしもモンゴルという集団が突出して強大というわけではなかった。むしろ、モンゴル族は少数民族であった。しかしながら、モンゴルはその最大の強みである「組織力」、「結束力」そして「計画性」をもって、近隣の敵方の人間・集団・部族・都市・国家を吸収、引き入れるなどしてその勢力を拡大していった。その際に特筆すべきことは「イルになる」という言葉である。この「イルになる」という表現は、いわゆる「仲間になる」ということである。また、この「イル」は前述の「ウルス」と同義語なのである。この言葉が示す通り、誰であれ自分たちを同じ「仲間」になれば、それでもう敵も味方もない、同じ「イル」もしくは「ウルス」、つまり一つのかたまりであり、国ということになるのである。こうした非常にゆるやかでおおらかな国家観・集団概念が、モンゴルの驚くべき急速な拡大の核心にあるのである。

言うなれば、ある特定の地域に住まう人々をモンゴル人と呼んでいたが、版図拡大によってそれぞれの地域にいた人々や遊牧民も、あとからモンゴル人となったと言っても良い。そしてそこには、時期や地域により、多種多様な人間の群れがあった。第一の群れは、チンギス王室を中心とする、もとからモンゴルの人々である。いわば「モンゴルのなかのモンゴル」とでも言えよう。そして第二の群れが、1206 年の国家成立の時に「モンゴル・ウルス」とされた大量の遊牧民たちである。彼らは、ジャイラル・コンギラト・バリアン・アルラト・バルラスなど、それぞれ固有の部族集団の名を持ちながら、その一方で「モンゴル」でもあるといういわば二重の帰属意識を持つ。これが、モンゴル人のアイデンティティを考える際に非常に重要な要素になると考えられる。

第一の群れの人々は、「自分たちはモンゴル人である」と強く感じていたように思われる。そして、帝国や君主に対する忠誠心のようなものも醸成されていたであろう。それに対して第二の群れは、第一の群れと比較したら、自分たちがモンゴル人であるとは強く感じてはいなかったかもしれない。そして、忠誠心もそこまで強くなかったのではなかろうか。ただ、

仲間となったのだから自分たちも一応は「モンゴル人」であり、ここは「モンゴル帝国」であると認識していたのではなかろうか。とは言え、反旗を翻して、というところまでは至らず、ただそのゆるやかな統治の中に身を置く選択を選んだと言えるかもしれない。そういう意味では、モンゴル帝国を今でいうところの「コミュニティー」や「サロン」と考えることもできるかもしれない。

現代のコミュニティーとは、趣味や実務に関わることで大小さまざまなコミュニティーが誕生しており、一部の主宰者は多大な影響力を持っていることもある。その主宰者を筆頭に、いわゆる運営を行う幹部がいて、メンバーがいるという恰好である。モンゴル帝国の場合、チンギス・カーンこそがその主宰者であり、近親者を含めた首脳陣が幹部となり、コミュニティーのメンバーたる広義のモンゴル人を統治していたのではなかろうか。メンバーの主宰者やコミュニティーに対する忠誠心もまちまちであるし、中でももっとも似通った点というのが、先に述べた二重の帰属意識である。コミュニティーのメンバーは、所属するコミュニティーの一員でありながら、それこそ所属している企業や団体の一員としての帰属意識も持ち合わせているだろう。それが、モンゴルに組み入れられたあとの各固有の部族集団のそれと似通っているように思われる。そのような、第一集団と第二集団でレイヤー化した、ゆるやかなアイデンティティが、コミュニティーたるモンゴルの民には存在していたのではなかろうか。

図 3　レイヤー化されたアイデンティティ　筆者作成

【レイヤー化されたモンゴル人のアイデンティティ】

①モンゴル人という意識の強い「幹部」

②チンギス王室を中心とする、もとからのモンゴル人たち：比較的強い帰属意識

③後に「イル」になる、それぞれの固有の部族集団を持っていた民族の人たち：二重の帰属意識

こういった帰属意識の在り方は、これから日本で増えていくであろう働き方に似ている部分があるかもしれない。一つの組織にのみ属することなく、複数の組織に身を置き、それぞれに帰属意識を持ちながらも、「個」という概念も同時に持ち合わせているといったような価値観である。だとするならば、当時のモンゴル人たちは、今これから日本が迎えようとしている個人の在り方を、およそ 800 年前に既に実現していたということになるのではなかろうか。

また、「モンゴル人」たる集団が上記の通り多重構造であっただけではなく、システムとしての帝国も、大カアンの中央ウルスとその他の一族ウルスからなる、多元的な複合体であった。このように、人だけでなく組織そのものの在り方も多重構造の複合体であったということから、モンゴル人およびモンゴル帝国の複雑性のようなものが浮かび上がってくるよ

うに思われる。そしてその複雑性こそが、ゆるやかな統治を成し遂げ、しなやかな帰属意識を醸成したのではなかろうか。

第２節　　元朝の官僚

モンゴル帝国は出生別に民族を区別していた。その中に、モンゴル帝国には漢人役人と呼ばれる一部の人が存在していた。当時のモンゴル帝国（元）では、モンゴル人を第一に、色目人（中央アジア、西アジア出身）、漢人（旧金朝の民）、南臣（旧南宋の民）と順に権力を持つような、モンゴル人第一主義が取られていた。

しかし、漢人役人達は、その実力や、優秀さから、役職を与えられ、モンゴル帝国の発展に貢献していた。

本節では、モンゴル人第一主義を掲げたモンゴル帝国内での漢人の役割について論じる。

第１項　漢人役人とは

モンゴル帝国は出生別に民族を区別していた。その中に、モンゴル帝国には漢人役人と呼ばれる一部の人が存在していた。当時のモンゴル帝国（元）では、モンゴル人を第一に、色目人（中央アジア、西アジア出身）、漢人（旧金朝の民）、南臣（旧南宋の民）と順に権力を持つような、モンゴル人第一主義が取られていた。

しかし、漢人役人達は、その実力や、優秀さから、役職を与えられ、モンゴル帝国の発展に貢献していた。

本節では、モンゴル人第一主義を掲げたモンゴル帝国内での漢人の役割について論じる。

第２項　役割

耶律楚材（1190～1244）はモンゴル帝国初期の功臣の一人で、若くから、儒学・地理・歴史・天文などに通じ、金王朝下での科挙では首席で合格、秘書省・尚書省に仕えた。
チンギス・ハーンの没後はオゴタイ擁立に尽力し、彼の即位後は中華王朝の伝統に基づく政治･財政制度をモンゴル帝国に導入､行政府たる中書省が発足するとその初代長官（中書令、宰相職に相当）となった。

モンゴル帝国では主に財政制度の整備で収奪を防ぎ、民衆を守り、元の基盤の制度を築き上げたとされている。しかし、耶律楚材はペルシア語の資料には一切登場せず、耶律楚材を称えた文脈は、耶律楚材の自己申告か、耶律楚材の後継者の持ち上げを拠り所とし書かれている。この時代の漢文資料では、書記であったと記されていた。更に、ウイグル人鎮海が命令文、あるいは事例書などに「某人に付与す。」と文言が入っていなければ、耶律楚材の文書に権限は無いとされていた。耶律楚材は中書省において、あるいは、中書省が無力であったと考えられる。杉山正明『耶律楚材とその時代』によると、耶律楚材は、宰相ではなく、ただの文書係であり､周囲には宰相としてふるまい､自尊心を満たしていたと書かれている。

モンゴル帝国の漢人役人に李璮（？～1262 年）という人物がいる。李璮はモンゴル帝国において、父である、李全（？～1231）以来、五十年にわたる実力を東南山東・淮北（わいほく）一帯で行使していた強諸侯であった。

この山東は古来から、豊かな地であるとされており、金時代の、貞祐の南遷の際にも、山東を有力な遷都候補地として、候補に挙げられていた。李全はこの力を過信し、南総に侵攻したが揚州に敗北し、死亡した。

李璮は李全の勢力を引き継ぎ、山東の塩、鉄、密売易を使い、繁栄させた。モンゴルに仕えていたが、モンゴル帝国の中央集権志向に次第に不満を持ち、独自に勢力圏を拡大した。そしてフビライとアリクブケの帝位争奪の際、独立すべく挙兵。南総へ通じた。南総とともにフビライを攻めるがこれは失敗に終わる。（ 李璮の叛乱）

この事件を機にフビライは漢人軍閥の行政・徴税権を奪って地縁性を排除し、華北をモンゴル系貴族の投下領と朝臣による一元支配に再編した。

第３項　結論

モンゴル帝国の発展において、漢人役人の活躍は欠かせないものだったであろう。耶律楚材が居なければ、中華王朝のシステムはモンゴル帝国に組み込まれず、ここまでの発展は望めなかったと言える。李璮の行動は決してモンゴル帝国に利益をもたらすものでは無かったが、結果としてモンゴル帝国内のシステムの再編に繋がり、影響をもたらした。

第３節　　モンゴル帝国の都・北京

第１項　問題提起

本章はモンゴル帝国の都を問題関心として取り上げる。まず、最初の問題提起として、モンゴル帝国の５代目カーンで元王朝の初代皇帝（大カーン）クビライは、なぜモンゴル帝国の都であったカラコラム（ここは長安や洛陽などこれまでの中国史で栄え、都城や駅伝制などすでに都としての機能のあった場所）から、「大都」（北京）へ都を遷したのかについて言及する。次に、遷された都としての北京が、モンゴル帝国滅亡後も現代まで中国、東アジアに大きな影響を与え「首都」として存在し続けたのはなぜか、そこにモンゴル帝国の影響はあったのかについて言及する。

第２項　「大都」遷都の経緯

モンゴル帝国初代皇帝チンギス＝カーンは、1211 年自ら軍を指揮して金（中国の北方）に侵攻した。結果金は敗北し、モンゴルに対する君臣の関係を認めて歳貢（使者を派遣してみつぎものを納めること）を約束し、公主（金の第７代皇帝である衛紹王の皇女）をチンギスに嫁がせる内容の講和を結んだ。しかし、1214 年金はモンゴルを避けるため燕京（現在の北京）から河南の開封に遷都した。チンギスはこれを講和違反とし、金に対する再侵攻を開始、1232 年三峰山の戦いで金は軍事力を失い、1234 年モンゴル帝国は金を占領した。現在の中国のおよそ北半分を支配したモンゴル帝国初代皇帝チンギスの孫、クビライは、モンゴル帝国代４代皇帝モンケが行った東西の大遠征（クビライによる南宋侵攻、フレグによる西アジア遠征）により、チベットや雲南（大理）に遠征、南宋の背後を抑えて、南宋征服を計画していた。

クビライは草原の軍事力、中華の経済力、ムスリムの商業力というユーラシア史をつらぬく 3 つの歴史的伝統のうえに立ち、その 3 者を融合するという国家思想に基づいて、ユーラシアの遊牧地域の双方に基盤をもつ新型の国家建設に着手した。

クビライは 1260 年にモンケの急死後、独自にクリルタイ（国の重要事項を決めえる会議）を強行し、第 5 代カーンに即位した。同じく第 5 代カーンを名乗った末弟のアリクブケは、クビライの即位を認めず激しく争うこととなったが（モンゴル帝国帝位継承戦）、何度目かの戦いの後、クビライはアリクブケをカラコルムから追い出し、1264 年に権力を握った。その後、1264 年にクビライは都をカラコルムから、「中都」（もとの燕京で金の都だった現在の北京）に遷すことを宣言、新たな都城の建設を開始し、1267 年に現在の北京に遷都した。

ここで都城建設の状況について若干の説明を加えておきたい。1267 年 1 月、新らたな都城の城壁建設に着手、同年 4 月、カーンのオルド（天幕群）宮城牆の設置に取り掛かり、城壁は 1268 年 10 月に完成した。1271 年 11 月、大元の国号が定められた時から、中国王朝らしい大内宮殿建設が始まり、1273 年大明殿、延春閣が完成した。1274 年 1 月、大内宮殿完成にともないクビライは正殿に「御し」、皇太子・諸王や百官の朝賀を受けたという。1276 年には、「大都」の外郭城が完成した（1270 年 2 月に「中都」が「大都」に改称されている）。1293 年、江南からの物資を「大都」城内の積水潭に運び入れる運河「通恵河」が開通し、クビライの構想した「大都」はこの時点でほぼ完成していた。

1271 年、国号が中国風の「元」となり、既述の通り、「中都」は新元号の前に「大都」と改称された。これは中国全土の支配を意味した。クビライは、1276 年には南宋を滅ぼし、さらに 1279 年に厓山の戦いで残存勢力を一掃して、中国全土を統一支配した。元による漢民族支配はそれから約 90 年間続き、モンゴル高原、西域、満州を含み、周辺のチベット、朝鮮などを属国として支配した。1274 年と 1281 年の日本への侵攻（元寇）をはじめ、東南アジア各地も含めて周辺諸地に対する元の遠征軍派遣が盛んに行われた。これは交易圏の拡張という要素も含んでいた。

第 3 項　大都遷都の意図

チンギスの金侵攻からクビライと弟のアリクブケとの政治的対立という歴史から「大都」遷都の意図を考えることができる。

第 4 代皇帝モンケ=カーンの死後、後継者争いは大きく分けてモンケの弟たち（クビライ・フレグ・アリクブケ）とモンケの遺児たちの 2 つに分けられた。しかし、モンケの遺児たちは年齢が若すぎたため除外、また、フレグは先に述べた東西大遠征で遠く離れたイランにおり、継承の候補から除外された。遊牧民の末子相続の風習から、帝位継承の正当性が強かったのは末弟のアリクブケであり、モンケの遠征時もモンゴル帝国の都であったカラコラムの留守を任されていたため、支持する者も多く当初は優勢だった。一方クビライは、南宋侵攻中でカラコラムにいなかった。しかし、この時クビライはあえてカラコラムに戻るのではなく、モンケの死後、散り散りになった諸将たちを取り入れるため、南下を続けた。また、東西大遠征につきモンゴル高原の兵はさほど多くなかったこと、クビラ

イが華北農耕地帯の豊富な物資を背景にした経済的優位性が要因となり、このモンゴル帝国帝位継承戦はクビライが勝利し、彼は第 5 代皇帝となった。

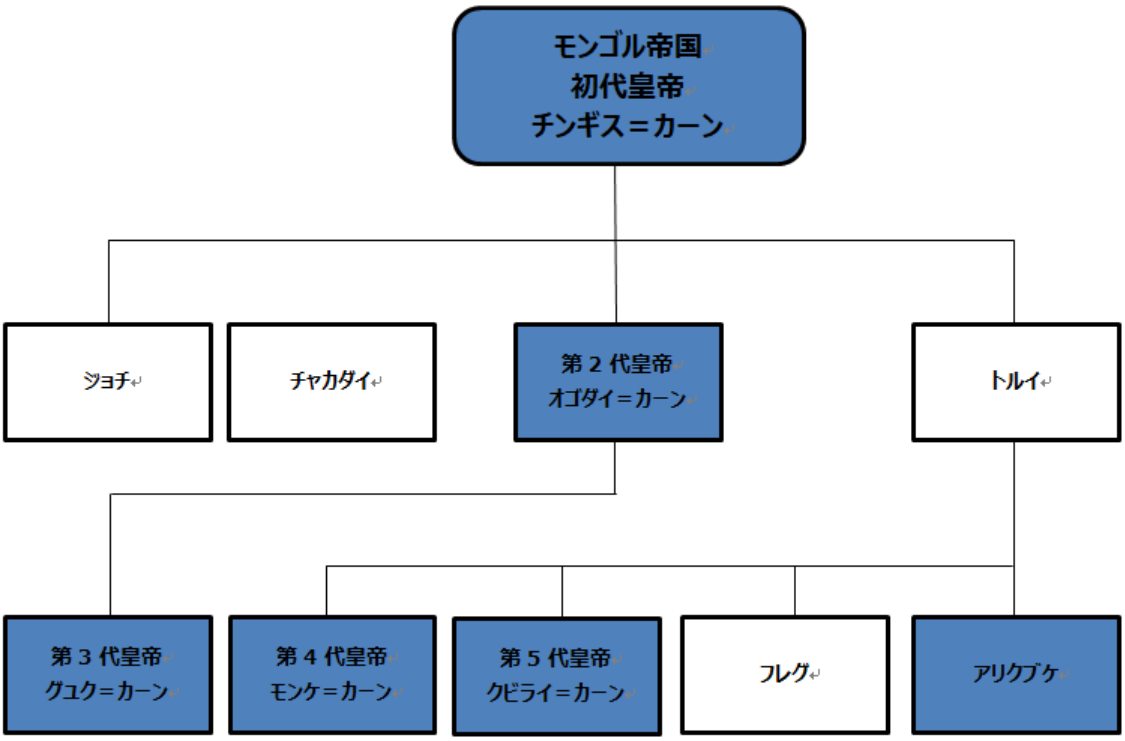


図 4　チンギス・カーン家系図
筆者杉浦作成

この戦いの後、クビライはモンゴル高原のカラコラムから「大都」に都を遷すわけだが、その遷都の背景について考察したい。クビライ、またはモンゴル帝国にとってのカラコラムは、継承戦の相手であるアリクブケの本拠地であり、象徴として考えられていたようである。しかもアリクブケだけでなく、兄で第 4 代皇帝モンケや歴代の皇帝にとっての象徴でもあった。クビライは遊牧民の末弟相続の風習から、自分が正当性のある帝位継承者ではないという「後ろめたさ」があったのではないだろうか。そして、クビライは正当性のない帝位継承者である自身が支配者となった場合、新しい象徴的な場所を必要とし、自らの本拠地である華北に都を作ろうとしたと考えられる。しかしながら、この時はまだ南宋に支配は及んでなく、中国全土を制圧できていない状態だった。南宋を支配し中国全土統一の野望を果たしたのち、カラコラムよりも南に都を造り、華北農耕地帯の豊富な資源を手中に収めたまま、旧来のモンゴル帝国よりも強大な力を持つ支配者として新たな地で君臨したいと考えたのであろう。従って、クビライがなぜ遷都を考えたのか、それがなぜ南宋支配に力を入れることになったのかについては、これらの背景から説明できる。しかしながら、同時に遊牧民という立場から新たに支配者となったクビライの苦労は計り知れないものであっただろう。次節では、クビライの遷都がなぜ「大都」になったのかについて、考察する。

第 4 項　なぜ大都（北京）だったのか

カラコラムよりも南下に都を作るのならば、なぜ現在の北京がある「大都」であったのだろうか。当時の歴史からみれば、実際のところもっと最適な場所があった。それは長安と洛陽である。長安も洛陽も元以前から都としての機能をもっており、シルクロードの玄関口として栄えた。盆地で大きな山に囲まれ侵入が難しく、また黄河の度重なる氾濫の影響を受けづらかった。

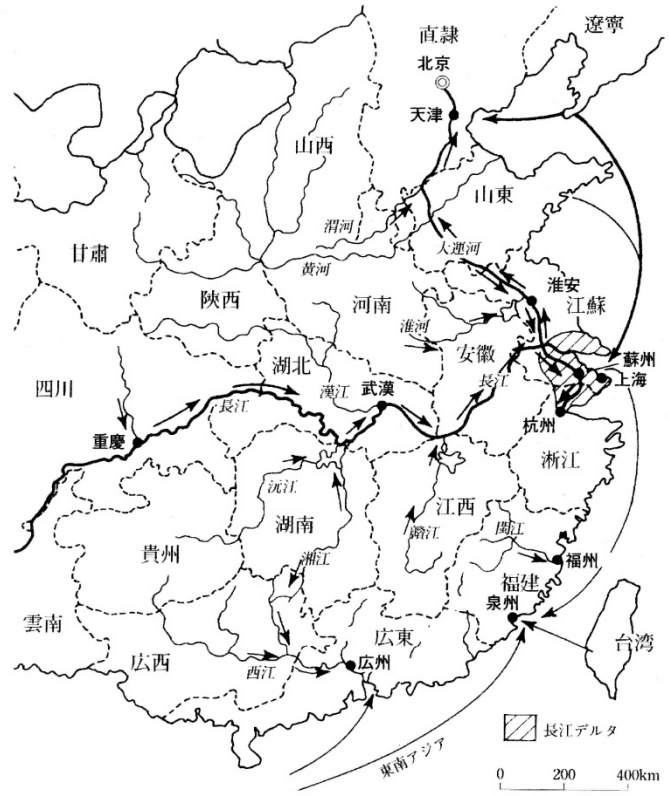


図 5　中国の物資輸送を示した図

出典：斯波義信　『中国都市史』（東京大学出版会, 2002）167 項　図 34

しかし、クビライは「大都」を選んだ。そこには 2 つの要因があったと考えられる。1 つは経済的要因だ。長安と洛陽は中国のおおよそ中央に位置している。そこでは物流による穀物などの物資運搬に困難な問題を抱えており東南地方からの漕運（水路での運搬）に頼りきっていたため、物流の面で限界が生じていた。2 つ目は軍事的要因だ。遼、金と相次いで非漢族政権が成立したのだが、それらはすべてまず北中国を拠点とした。この結果、 長安や洛陽は軍事的重要性を失ってしまったのである。

それに対し、「大都」は帝位継承戦の勝利の要因の 1 つとなった華北農耕地帯をはじめ豊かな土地があった。また、海から近く、南からの物資を海上輸送し、通恵河（運河）を通じて北京に運ぶというルートも可能にした。元時代は多くの運河が建設され、江南地方から「大都」に直接通じる運河も造られた。しかし、冬になると「大都」近くの運河が凍って使えなくなったのであるが、海上運送は冬でもより多くの物資を運ぶことができた。多くの物資を運ぶのにあたり、海上輸送は最適であり、海に近いという立地が一つの要因であったと考えられる。

さらに、洛陽や長安は内陸で山に囲まれており、それが争いの中で侵攻を防いだ要因ではあったが、地形的にクビライの目指した都城には適していなかったと指摘できる。クビライは東西南北に正確な古代中国式の宮殿を作った。この宮殿は漢民族とモンゴル帝国を融合する意図があり、宮殿建設において、北京は比較的平地で理想的な土地であった。

つまり、クビライのおかげで、遊牧地域のモンゴリアと農耕地域の中国本土との双方にまたがる国が建設されることになったのである。その両極性は、モンゴル草原に位置する

上都（夏の都）と華北平原の北端に位置する「大都」（冬の都）とを、カーン自らが移動する両都「巡幸制」に象徴的に示されている。

1275 年「大都」を訪れたイタリア、ヴェネツィアの商人マルコ・ポーロは、旅行記「東方見聞録」で「大都」の事を「日々都にやってくる商人や外国人はおびただしい数にのぼり、世界中のどんな都市よりも高価な商品が売買され、その量も他の追随を許さない」と述べている。このことからも「大都」の繁栄を見ることができる。

第 5 項　元衰退後のモンゴル帝国の影響

図 6　明朝の領土

出典：Wikipedia 掲載、Michal Klajban 制作、1580 年明の領域。羈縻地烏斯蔵（チベット）・奴児干（満

元が中国から撤退した後、朱元璋は元を北方方面へ追いやって明朝を建国した。明の 3 代皇帝永楽帝が、2 代皇帝建文帝から皇位を簒奪すると、首都を南京から北京に遷都した。明の初代皇帝朱元璋、2 代皇帝建文帝は、海と近く明の領土の比較的中心地に位置する南京を都としていた。これは、この地が元の時代にモンゴル帝国に支配されていたことと関係している。つまり、南京を都とすることは、「漢民族の国である」という明の主張として捉えることができる。

しかしながら、永楽帝は明の領土の最北に位置する北京を都として選んだ。本来ならば中心に位置する南京のほうが理想的といえるだろうが、永楽帝はそのような選択を取らなかった。

永楽帝の北京遷都には、クビライが漢民族とモンゴル帝国との融合を図ったように、中華と夷狄（野蛮人・外国人）を統合するという「華夷一統」の実現を目指す意図があった。またこの遷都には、モンゴル・元時代に世界の 4 分の 1 を支配し、格段に広がった東アジア世界を「永楽帝が継承する」といった意味も含まれていた。永楽帝は、元時代の都であった北京を中心とすることで、自らが中華、または「世界」の中心であり、大きな権力の象徴であると示したかったのである。このように、モンゴル帝国による中華支配という歴史は、永楽帝の北京遷都に影響を与えた。さらに永楽帝は、帝国衰退後にモンゴル高

原へと引き下がり北元として存続し続けた、旧「モンゴル帝国」に対する抑止にも取り組んだ。彼らが安全保障を兼ね軍事力を北方へ集めたことが、これを証明している。

なお、日本の豊臣秀吉は、朝鮮遠征のその先に北京遷都を考え、天皇の北京移住計画を立てていたという。この点においても、北京の重要性は、元が衰退し明ができた 1368 年から、220 年以上経った豊臣秀吉による文禄の役（1592 年）、慶長の役（1597 年）と併せて、引き続きその魅力と影響力に当時の人々が惹かれていたとみることができる。

北京の重要性は強く現代まで残っている。これを紐解く歴史に、モンゴル帝国・元、クビライ、そして明の永楽帝の存在があり、今日の華夷思想につながっているのである。

第４節　　少数民族モンゴル族による漢民族支配

第１項　元朝下のモンゴル第一主義の身分制度

モンゴル帝国が史上最大の版図を形成できた要因として、民族や宗教の多様性を受容し、カーンの下、ゆるやかな統治を敷いてきたことにあることは、2017 年度、2018 年度の私たちの研究からも明らかである。

一方、少数民族であるモンゴル族が多民族・多数派民族を統治する為には、支配する仕組みがあったからこそ、巨大帝国を築くことができたはずである。

果たしてゆるやかな統治によって如何に多民族・多数派民族を支配することができたのか、という 2 年間の研究から今なお残された課題として、元朝におけるモンゴル族の漢民族支配に焦点を充て、紐解いてゆきたい。

元代において、多数を占める漢民族の立場から見ると元朝はモンゴル族による「征服王朝」すなわち、漢民族以外の民族に支配されていた時代である。

当時の人民は、モンゴル人・色目人・漢人・南人の 4 種に区分されていた、という見解に着目する。

「元朝は基本方針として、このような中国の伝統を破って、種族的な差別待遇をきびしく行った。モンゴル人を社会の最上層におき、つぎには西方系の色目人、最下層に漢人をおいた。この漢人はさらに二分して漢人と南人に区別することもある」（2000、田村、p. 238）とあるように、モンゴル人を最上層として中央官庁の長官はモンゴル人を任用することとされていた。

色目人とは西方系に属する多様な民族を一括りに称しており、その構成は、チベット系タングート、ウイグル人、イラン系・テュルク系ムスリムなどから成る。色目人は、譜代関係を重視するモンゴル人にとってモンゴルに帰属したのが漢人や南人よりも早かったことや、元において 100 万人程度と推定されるモンゴル人が多数派の 1,000 万人の漢人と 6,000 万人の南人を支配する上で、漢人・南人とは異文化の色目人を重用することで、漢化を防ぎ統治をしやすくする狙いもあったと思われる。色目人は、モンゴル人に準ずる地位とされ、モンゴル人の人材を補う形で中央や地方の長官に登用されたり、次官や補佐官といった位を占めていたのである。

漢人は金朝の遺民である、キタイ人・ジュルチン人・高麗人を含めた華北の漢人を指し、南人は南宋の遺民である江南の人々を指している。漢人においては、モンゴル帝国・元朝以前に科挙制度により官僚を占めていた人々がモンゴル人・色目人にその地位を追われ冷遇されていたといえる。

このような身分制度は、階級のみならず刑法にも表れていた。例えば、モンゴル人と漢人が争いモンゴル人が漢人を殴っても報復してはならない、モンゴル人が漢人を殺しても葬式費用を支払えば罪に問われないなど、少数派のモンゴル人を保護するものであった。

こうした漢人冷遇・抑圧の制度に、モンゴル帝国以前の中国において優遇されてきた漢人知識人たちが不満を募らせ、反モンゴル意識が高まっていた、という見方もある。

表 1　モンゴル第一主義の身分制度　筆者作成

1	蒙古人
2	色目人
3	漢人
4	南人

第 2 項　元朝下における漢民族抑圧はなかった

一方で、人民が 4 種に区分された身分制度は確立されておらず、「漢人」「南人」が抑圧されていたという見方に疑問をもつ見解が近年の研究では主流となっている事実もある。

2016 年初版の「概説中国史 下 近世-近現代」によると、「ところでかつて、元代社会を象徴する言葉として、モンゴル第一主義という用語がよく使われた。元朝では、モンゴル人官僚が要職を独占し、西方出身者の色目人と共に支配者層を形成し、華北の旧金領の人々を漢人、江南の旧南宋領の人々を南人と呼んで差別して冷遇したというのである。しかし、近年、その認識は誤りであることが多くの研究者たちから指摘されている。」（2016、冨谷・森田、p. 101）と述べている。

また、杉山正明著「クビライの挑戦」によると「支配層であるモンゴル達のほかには、とくに身分さや階級制度を設けたことはない。最下層に置かれたという南人が、とくに手ひどく虐待されたなどという事実は見られない。それどころか、最上層にあったはずのモンゴルでも王族や族長クラスは別だが、おちぶれて妻子を売ったり、日雇いの日々を募集する市場に自ら立ったりしたという事例もある。」（2010、杉山、p. 53）としており、身分制度については完全に否定した見解である。

元代において、漢民族はモンゴルの征服王朝によって抑圧され冷遇された時代であったという見方は、漢民族以外の支配の時代に対する、近現代の漢民族を中心とした中国からの視点による歴史観と位置づけるものであろう。

近年の研究から、それまで語られていた身分制度はなかったとして、モンゴル帝国は中国伝統の科挙制度を元朝下において廃止したという事実はある。そして、1313 年モンゴル帝国第 8 代皇帝・アユルバルワダ（仁宗）の時代に初めて科挙を実施し、復活させた。但し試験はモンゴル人・色目人用のコースと漢人・南人用のコースとに分かれていた。1 回の合格定員 100 名であり、モンゴル人・色目人・漢人・南人で各 4 分の 1 の合格者としていたことから、人口比率を勘案すると漢人、南人にとっては極めて狭き門であったといえる。

モンゴル帝国は、征服した地域や属国の従来からの制度や文化を尊重するという、ゆるやかな統治が成功要因であったとしながらも、元朝下の科挙制度に見られる民族別のコースは、前述の身分制度が存在しなかったとしても、モンゴル人・色目人優位とした科挙の復活であったといえる。

モンゴル帝国は根脚尊重であり、モンゴルに自ら投降した者は協力者であり、やむなく投降した者は隷属者であるという考え方があった。モンゴルに帰属した時期やその経緯を考慮すると、色目人・漢人・南人の順に並ぶことは理解できる。

また、協力者とみなされるか否かは、属人的な側面であり、漢人である耶律中（ヤリツチュウ）や史天沢（シテンタク）が中書右丞相という最高官位に就いていたことからもそこに身分制度はなく、モンゴルとの関係性と実力があれば登用していた事実が存在するのである。

つまり、身分制度による抑圧はなかったものの少数民族が多数派の漢民族を支配できるよう、同じ少数派である色目人を上層に配置しながらも、モンゴルとの関係性と実力を重視し多数派の漢人から優秀人材を登用し、モンゴル支配層を頂点としたパワーバランスの均衡を保ったヒエラルキーを形成できていたのではないかと考えるのである。

少数民族による多数派民族の支配、ここでいうモンゴル人の漢民族支配をアメとムチで表現すると、漢民族の制度や文化を尊重するアメにより統治が成功したのか、或いは明らかな身分制度はなかったものの、モンゴル人を頂点とするヒエラルキーがムチとして機能していたから 1 世紀に渡り統治できたのか、ここまで述べた内容からはまだ見えてこない。

ここから、モンゴル帝国・元朝同様に、満州族が漢民族を統治した大清帝国における少数民族による多数派民族支配の構造を理解し、モンゴル帝国と比較してゆくことによって「モンゴル帝国が元を 100 年余り統治できた多数派民族への統治手法が優れていたのか」或いは「大清帝国が 300 年近く多数派民族を統治できたことと比較してモンゴル帝国は劣っていたのか」という点を見出してゆく。

第３章　モンゴル帝国以降（明・清・現代）の中国

第１節　大清帝国における少数民族満州族の漢民族支配

大清帝国は、1616 年の建国から 1912 年まで 300 年弱継続した帝国であり、実質は、満州族とモンゴル族が連合して漢民族を統治し、チベット人、イスラム教徒を保護する構造であった。

モンゴル帝国・元の時代と同様に、漢民族以外の少数民族が漢民族を支配した時代であり、漢民族からの視点では、征服王朝という言い方となる時代である。

北東の少数民族である満州族が如何にして多数派民族の漢民族をモンゴル帝国の約 3 倍にあたる 300 年近い期間を統治できたのかをその支配制度を軸に見てゆく。

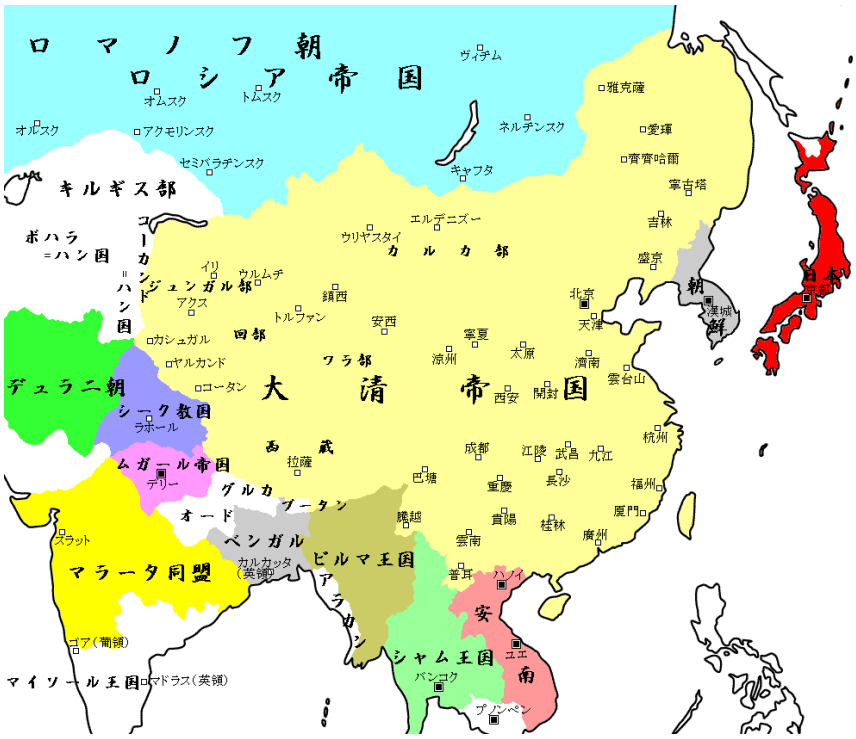


図 7　大清帝国の版図

出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/

第１項　八旗制・官僚制度における漢民族の扱い

1636 年瀋陽にて満州・モンゴル・漢人の代表から推戴されてホンタイジが皇帝に即位し大清帝国が建国された。大清帝国の建国に参加した漢人とは、遼東に住んでいた漢人であり既に清の前身である後金に服属していた人たちと、清に降伏した明の武将・孔有徳らであった。遼東に住んでいた農民は 13 世紀モンゴル帝国時代に 6 度に渡ってモンゴル軍の侵攻を受けて、満州に連れてこられた高麗人の後裔であったともいわれている。

また、建国に参加したモンゴル人はクビライ家の子孫などを領主とする人々であったが、清の建国時には既に後金の勢力下に属していた人たちである。

建国の満州族・モンゴル族・漢民族はその時点で満州族に従っていた人々であり、1644年の明朝滅亡後に清が北京にはいって統治した、中国・漢民族とはその位置づけが違うといえる。

清朝の支配制度の根底は「八旗制度」である。八旗は軍事制度出ると同時にあらゆる統治組織の根底でもあった。清朝の八旗は、満州八旗に加えて、蒙古八旗、漢軍八旗が導入された。八旗に属する旗人たちは、モンゴル人、漢人でありながら、満州人と同化している支配層といえる（実際、清朝滅亡後に彼らは民族区分に「満州族」を選択している）。

大清帝国の中枢機能として政治や軍事の意思決定は八旗の旗王と最高権力者である皇帝にあったのである。

1644年北京に入った満州族は、紫禁城を取り巻く内城を東西南北8つの区画に区分して、首都防衛の為の八旗の兵営を建てた。この場所が現在の胡同（フートン）と呼ばれる市街地である。そして、それまで住んでいた漢民族たちは、外城へと追いやられたのである。また、漢民族の民は北京周辺の土地を奪い取られて、旗人たちに旗地として割り当てられた。

次に清朝における官庁の制度に眼を向けてみる。1631年には明の中央官庁を模した六部が設置され、清朝建国の1636年には文書行政の一端を担う「内三院」と明の監察機関を取り入れた都察院が設置された。さらに1638年には、モンゴル事務を担当する理藩院を置いた。これらは一見、明朝式官制の導入であり、清朝の漢化ともとれるが、これはあくまで事務組織の形式として明朝式を導入したものであり、それを動かすポストに充てられるのは旗人即ち満州族と満州族に当初から服属している蒙古旗人・漢軍旗人であった。その八旗においても序列があり、満州旗人・蒙古旗人・漢軍旗人の順であり旗人の中でも漢軍旗人は序列が低くなっている。満州旗人には特別な世襲が認められており、少数民族である満州族の優位が官僚制度の中でも保たれていたのである。

さらに清朝では、モンゴル草原、現在の青海省・四川省西部を含めたチベット、回部と呼ばれていた新疆を「藩部」と呼び、藩部には種族自治を認めていた。

漢民族とは一線を画し、モンゴルに対しては格別の敬意を表して、前述のモンゴル事務を司る理藩院は中央官庁である六部と同格とされていた。

また、重要都市である南京、杭州、福州、荊州、成都、広州、西安、寧夏、密雲、青州などには「駐防」と呼ばれる八旗が駐屯し、その地域を城壁で区切って八旗が集まって住んでいた。それを「満城」と呼んでいた。つまり、八旗と一般の漢人とを区別していたのである。

つまり、漢民族に対しては満州族が直接支配をするが、モンゴル諸部はモンゴル民族に任せるという姿勢が表れていたのである。

支配層の狩猟民族である満州人は、遊牧民であるモンゴル人と農耕民族である漢人の利害が対立することを理解していたことから、両者を極力接触させずに摩擦が起きない政策を導入した。

例えば、万里の長城以北のモンゴル高原、さらに版図が広がったゴビ砂漠以北のモンゴル、青海草原とチベット、新疆など漢民族が定住していたもともとの明朝の地域外への漢

人農民の移住を禁止したのである。商人であっても１年を超えて滞在はできず、現地に家をもってはならない、現地で結婚してはならないといった、一種の隔離政策が存在していたのである。

ここまで述べたように、表面的には中華王朝である明朝の制度を継続した形式でありながらも、少数民族である満州族がモンゴル族を取り込みながら支配層を形成し、多数派の漢民族を統治・支配していた巧みな支配構造が出来上がっていたといえる。

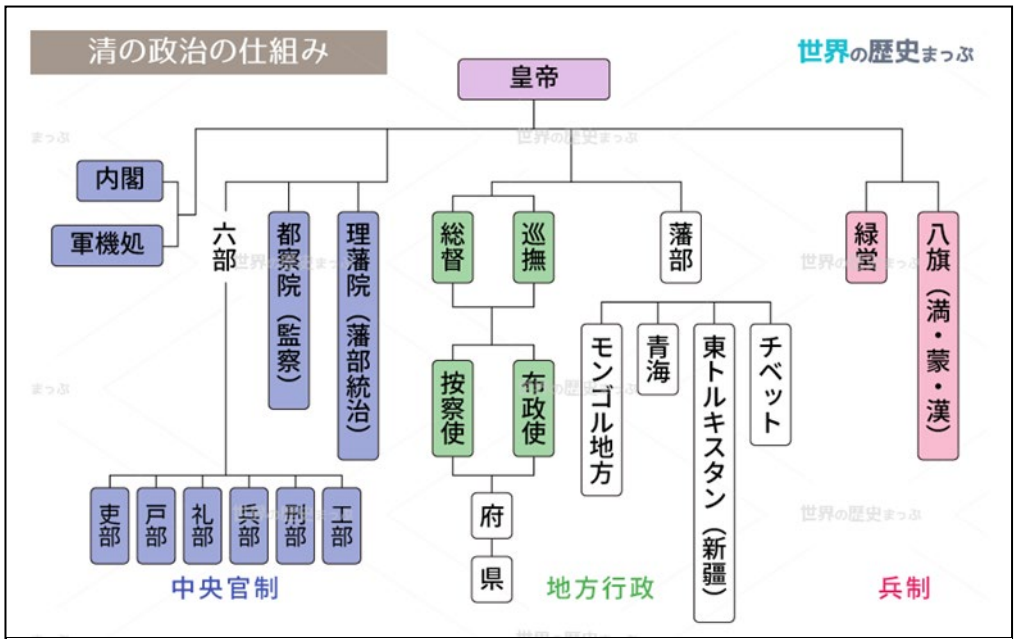


図 8　大清帝国の支配体制

出典：世界の歴史まっぷ　　https://sekainorekisi.com/download/

第２項　漢民族への強硬策

前項の支配制度・政策以外にも、満州族が優位性を保ち漢民族を支配してきたいくつかの政策を述べてゆく。

まず、辮髪が挙げられる。満州人の伝統的な髪形である辮髪を強制した。明朝の残党と区別するために清朝に降伏する漢人には辮髪を強制したのである。これによって満州人が支配者であることを示したといえる。漢民族の知識層にはこれに抵抗する者も多かったが、清朝は撤回することはなく、辮髪を拒否するならば死ぬか、坊主頭となって仏寺に籠るしかなかったのである。

次に、文字の獄が挙げられる。これは、清朝や皇帝に対しては批判的な文書を書いたことが分かると刑に処されるものである。清朝の隆盛時代といわれる康熙・雍正・乾隆の時代に特にこの文字の獄は厳しいものであり、八つ裂きの刑、死刑に処されることもあった。清朝満州族による思想統制、粛清といっても過言ではない。

同様に思想統制という観点から禁書が挙げられる。乾隆帝の時代の禁書が中国史上でも最も大規模であったといわれ、正に漢人に対する反満思想の制圧が目的であった。

第３項　漢民族への融和策

一方で、漢民族を支配するだけでなく、漢民族の支持を得て帝国のシステムを維持してゆくことも重要である。前項で述べた制度・政策を漢民族へのムチとするならば、融和としてのアメには如何なるものが存在していたのかを見てゆく。

まず、中国伝統の制度でもある科挙制度である。モンゴル帝国時代に一旦中止され、後に限定的に復活した科挙制度が明朝時代を経て、大清帝国下において満州族は、引き続き科挙制度を継続させたのである。

科挙により優秀な漢民族の知識人は官僚として登用されることから、満州族支配に対する不満を封印することにつながっていたといえる。

また、六部などの要職ポストの定員を偶数として「満漢併用制」を導入することで満州族と漢民族を同数登用する仕組みとしていたのである。

官僚制度においては、理藩院・内務府といった独自の制度を除いて、六部をはじめとして明の官僚制度をそのまま引き継いだ面が多い。このような漢民族への制度上の一定の配慮が為された統治であったと見える。しかしながら、例えば初期にあって六部には各長官の上に旗王が管理担当に任じられており、漢民族は決して支配者層となるものではなく、あくまで支配者は満州族であった。

第 2 節　少数民族による漢民族支配～モンゴル帝国と大清帝国の共通点～

モンゴル帝国は元朝支配において、異民族が漢民族を支配すると漢民族に同化してしまうことを理解していたともいわれる。モンゴル帝国が版図を拡大する中で、現地の制度や文化を尊重し、宗教の多様性を受容してきた統治の特徴が、結果的には元において色目人が漢民族への同化に至らなかったことが、多数派民族を支配し得た要素のひとつであったものと考える。同様に大清帝国においては、満州族が多数派の漢民族に同化しないことで支配を維持することが、モンゴル帝国・元朝よりも仕組み化されていったとみえる。

例えば、漢民族のチベット・新疆・モンゴル・満州への移住を禁止したこと、或いは支配層の満州族、漢民族よりも上層に位置するモンゴル族の女子が多数派の漢民族の嫁となることを禁ずるといった政策により、仕組みとして漢民族への同化に至らない措置がとられていた。これもモンゴル帝国同様、狩猟民族の満州族と遊牧民族のモンゴル族が農耕民族の漢民族と利害が対立することを清朝支配層の満州人はよく知っていたと考えられる。モンゴル帝国においても大清帝国においても、漢民族の制度・文化を一定の尊重と人材の登用を巧みに実施しながらも、アメとムチに見えるバランスを保ちながら、決して漢民族に同化することはなかったことが、100 年或いは 300 年の間、少数民族が中国の地にいて多数派である漢民族を統治・支配することができた共通する理由の 1 点目としたい。

2点目に、多数派民族を統治する経験値を挙げたい。モンゴル帝国が1271年に元を成立し、1279年漢民族が多数定住する南宋を滅ぼし、漢民族の中国を支配した時には、既にチンギス・ハーンの時代から5代の皇帝を経て、モンゴル族が版図を拡大し続け、ユーラシア各地において多様な民族を統治するという経験値を十分に蓄積してきた段階での漢民族の統治であった。同じく、大清帝国を建国した満州族は、1616年満州族の前身である女真族のヌルハチが建国した後金国を起源として、現在の中国東北部にて漢人・朝鮮人など女真族以外の民族も支配し、後にモンゴル族も支配下に入れた。つまり、1636年の大清帝国建国時には満州族はすでに多民族支配の経験と、組織統治の技術を持ち合わせていたといえるのではないだろうか。その経験値をもとに、多数派である漢民族を統治する仕組みを構築することができたという見方をしたい。

3点目に、誰が支配層であるかを明示する文字に関する共通点を挙げる。モンゴル帝国・5代皇帝クビライ・カーンは大元ウルスの領内にて共通の言語として使用する文字の制定を命じ、1269年パスパ文字が国字として公布された。従来のモンゴル語表記に使用していたウイグル文字を元の領域内で広く使用されている中国語の様な異なる言語に使用を広げることは現実的ではなかったことからパスパ文字の制定に至った。一方で実用性という目的ではなく、モンゴル帝国の大元ウルスであるという皇帝の権威を示す目的によって、パスパ文字を国字としたことで、特に多数派である漢民族に対しては、誰が支配者なのかを明示することができたという見解もある。

大清帝国においては、清の前身である後金国を建国したヌルハチが命じ、モンゴル文字の表記を応用した満州文字を制定した。その後大清帝国皇帝であるホンタイジが改良を命じ、清の時代には満州文字・モンゴル文字・漢文が三体と呼ばれ重んじられていた。また、民間の漢人には満州文字の使用は認められて居らず、満州文字・満州語の使用を認められたのは科挙に合格した限られた漢人であったことに着目したい。この様な点においても、満州族が多数派の漢民族を支配するで、誰が支配者であるかを明示してきたことが分かるのである。

1912年辛亥革命を経て、大清帝国が滅亡すると、紫禁城・故宮の額にはもともと満州文字と漢字が併記されていたが、中華民国は漢民族の王朝であるとして政権を握った袁世凱は、満州文字を消し去っていたのである。全ての満州文字を消し去るには至らなかったが、近代に至るまで尚、誰が支配する王朝なのかが、文字ひとつに込められ、漢民族王朝と漢民族以外の征服王朝、漢民族と少数民族から成る中国という、中国の歴史の問題がそこには横たわるのである。

図 9

出典：2018 年インターゼミフィールドワークにて筆者撮影

図 10

出典：2018 年インターゼミフィールドワークにて筆者撮影

第 3 節　漢民族による現代中国の多様な中華民族統治

モンゴル帝国・元と大清帝国における少数民族が多数派の漢民族を統治・支配できた共通項を見てきたが、歴代中国王朝は唐・元・清の時代以外は「漢民族による儒教・漢字の文化圏」の外へ版図を広げたことはない。つまり、漢民族支配の王朝には版図の限界があり、唐の鮮卑系支配、元のモンゴル支配、清の満州支配といった中華からみた夷狄による支配の時代にその版図が限界を越えて広がっているのである。

このことは、漢民族の領土におけるアメとムチによるバランスのとれた統治と、漢民族以外の領土における宗教への寛容さと自治を任せる手法が奏功していたことは、少数民族が支配するからこそ、成功したといえるのではないだろうか。

一方、現代の中華人民共和国は 56 の民族が集合した「中華民族」の国家とされるが、多数派の漢民族による「漢民族による儒教・漢字の文化圏」を越えた領域であり、満州族の大清帝国の版図を引き継いだ版図である。

したがって、モンゴル帝国・大清帝国といった漢民族の領域を超えた帝国同等の版図を、漢民族が統治している、それまでの中国の歴史とは異質な形である。

少数民族がしなやかに版図を広げた領域を、多数派の漢民族中心の国家が、多様性を受容し「しなやかに」統治し得るのかという疑問が浮かぶのである。

現代中国で起きている少数民族への統治は、多様性の受容とは対極ともいえる地域が存在する。例えば、新疆ウイグル自治区におけるウイグル族への対応である。2009 年頃からウイグル族により、数多くの事件が起きている。そうした中 2016 年には党が全国宗教工作会議を開催し「宗教の中国化」政策を鮮明に打ち出した。中国共産党はイスラム教自体を否定はしていないが、反政権的な動きの温床とあれば抑え込むのである。人権保護の観点から米国などから批判されている新疆ウイグル自治区の「再教育施設」の実態は「労働収容所」が実態であり 100 万人のウイグル族が迫害を受けているともいわれる。また、イスラム教徒への宗教弾圧という見方もある。

同様にチベット自治区におけるチベット人への思想統制・チベット仏教弾圧・強制収容も長年問題視され、弾圧と反乱が繰り返されている。

こうした現代の中国共産党による支配は、明らかにモンゴル帝国や大清帝国における多様な民族の統治、宗教への寛容さとは対極にあるのである。果たして、漢民族中心の中華の領域を越えた版図を、多数派民族の漢民族・中国共産党が将来にわたり 56 の民族が集合した中華民族に平和と安定をもたらす国家足り得るには、巨大国家の統治の在り方を歴史から学ぶ必要があると考えるのである。

図 11　チベット自治区・新疆ウイグル自治区

出典：http://kccn.konan-u.ac.jp/keizai/china/map.html

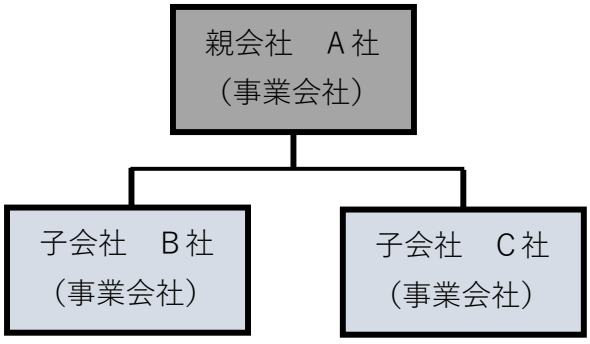


図 12　親会社が事業を営むグループ経営　筆者作成

第 4 節　少数民族による統治と現代日本企業

モンゴル帝国・元や大清帝国に見られた少数民族が多数派民族である漢民族を統治・支配できた歴史を現代の日本企業における純粋持ち株会社・ホールディングスによるグループ経営に照らし合わせてみる。

現代企業の親会社、子会社という資本関係によるグループ経営には大きく 2 つの形態に分けられる。1 つ目は、親会社が事業経営を営みながら子会社を有する形態である。（図 12）

母体となる親会社が子会社よりも事業規模の大きい、グループの基幹事業を営んでいることから、大が小をコントロール・統治する形態とえる。中国の歴史に照らし合わせる

と、現代の中華人民共和国が多数派を占める漢民族を中心に、少数民族を支配している構図と似ているといえる。1つ目の形態のメリット・デメリットを示してゆく。

メリットは、子会社はあくまで子会社であることから、親会社が子会社の事業をコントロールしやすい。親会社・子会社間の人材交流が容易である、という点が挙げられる。

デメリットとして、親会社による子会社への実権が強くなり過ぎる。親会社と関連の深い事業の子会社には過干渉、ノウハウの少ない子会社は放任してしまう、という点が挙げられる。

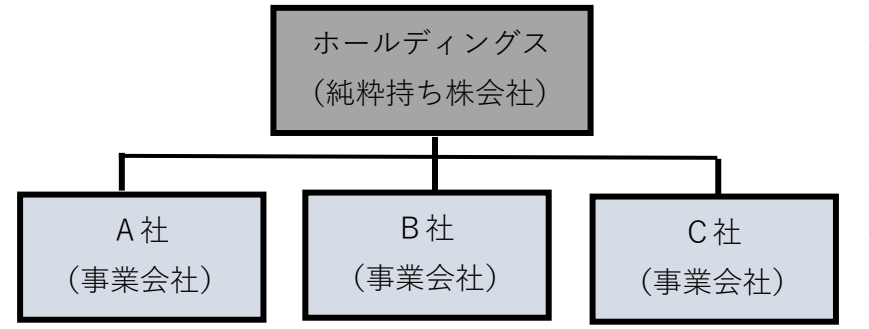


図 13　純粋持株会社によるグループ経営　筆者作成

次に2つ目の形態として、純粋持ち株会社いわゆるホールディングスによるグループ経営がある。（図 13）

日本における持株会社制度は、戦前の旧財閥（三井・三菱財閥など）は持株会社の形態となっていた。戦後、ＧＨＱ主導による1947年の過度経済力集中排除法施行により旧財閥解体（三井・三菱財閥など）が実施され、独占禁止法において持ち株会社の設立と既存の会社の持株会社化が禁止された。その後、時を経て1997年独禁法改正により純粋持株会社の設置が解禁され現在に至る。

持ち株会社による経営は、親会社のホールディングス自体は事業を営むことはなく、グループ全体の経営を最適にコントロールしてゆく役割であり、子会社となる各事業会社が事業会社の経営層を主体に事業を営む形態である。

前述同様に、中国歴代王朝に照らし合わせると、これまで述べてきたモンゴル帝国・元代のモンゴル族による漢民族の統治、そして大清帝国の満州族による漢民族統治に見られる、小が大をコントロールする組織に似ていると考えるのである。特にモンゴル帝国における、中国のみならず広くユーラシアの世界帝国と捉えると、モンゴル帝国の中枢は、帝国全体の最適化を担う役割であり、各地域の運営は地域を尊重し、一定の権限移譲による統治の構図と重なるのである。

2つ目の形態である純粋持ち株会社による経営のメリットとデメリットを示してゆく。

メリットとして、グループ経営と個別の事業会社が分離されていることから、事業会社に対する権限移譲により意思決定のスピードが上がることが挙げられる。また、事業拡大

や低採算事業からの撤退などをグループ全体の経営の最適化を最優先に判断できる。さらに、グループ内の事業或いは人材のシナジーを生むことが可能となる。

一方デメリットとして、傘下企業を直接的にコントロールしにくいことや、事業会社間、持ち株会社と傘下企業間において情報を共有しにくいことなどが挙げられる。

2010 年発表の旧みずほコーポレート銀行のレポートによると、持ち株会社制度のメリット・デメリットを踏まえた上で、グループ経営に効果を生む為には、「経済状況に応じて遠心力と求心力をバランスよくコントロールすること」としている。その背景として、持ち株会社制度は好景気の成長過程においてはメリットが活きる体制であり、景気低迷の縮小期にはデメリットが顕在化しやすく、景気低迷期には持ち株会社制度は弱い体制であると論じている。

求心力と遠心力とは、持ち株会社・親会社の「集権」と傘下企業・子会社への「分権」と言い換えられるものと考える。

つまり、少数民族による巨大帝国の統治として述べてきた、モンゴル帝国・元と大清帝国の統治の鍵は、求心力＝集権と遠心力＝分権を政治、経済、宗教、官民の忠誠・不満などの状況に応じて、バランスよく、巧みに使いこなしてきたことにあることが、現代企業と照らし合わせることで見えてくるのである。

一方で、現代企業がグループ経営に効果を生む手法として、モンゴル帝国や大清帝国の統治に学ぶべきことが多いと分かるのである。

第 5 節　モンゴル帝国滅亡後の北東アジア

第 1 項　高麗国の親明派と親元派

1368 年に朱元璋は大明帝国を建国した同年、明軍が大都（現在の北京）に攻めてきたことから、モンゴル帝国第 14 代皇帝トゴン・テムル・カーンは大都城から脱出し、モンゴル高原へと撤退した。

大明帝国においては、モンゴル人達が北へと撤退したことで、それまでのモンゴル帝国による元王朝は滅亡したとしており、北へ帰ったモンゴルを韃靼と称するようになった。

一方のモンゴル帝国では、漢民族の定住農耕地域を手放したであるとし、引き続き自分たちは大元ウルスであるという位置づけであった。

モンゴル帝国が中国の漢民族地域を手放して以降をそれまでの元朝と区別して「北元」という表現をしている。

ここで、モンゴル帝国・北元、大明帝国、高麗王国の関係性を見てゆく。

大明帝国成立後、高麗国は早速明へと使節を送り、明の属国となり明の年号「洪武」を使い始めたのである。しかし、モンゴル帝国・元の時代からモンゴルとは姻戚関係にあったことから、モンゴル帝国皇帝親族との関りは深く、『高麗史節要』によると 1377 年に、北元が高麗に使者を派遣すると、この年からまた北元の年号である「宣光」を使うこととなったのである。

この時代の 32 代高麗国王・禑王（ぐおう）は、年号のみならず、モンゴル式の朝服を復活し、明の属国からモンゴル帝国・北元の属国への復帰をめざしたのである。

しかし翌年には再び明の年号を使用することとなるのである。

このような流れを見ると、当時の高麗国が明と北元という 2 つの国の間で、外交上の優位を見極めたくも定まらない様に見える。

その背景には、モンゴル帝国による元の滅亡後の高麗国において、親明派と親元派との対立があったことも要因である。

高麗国の武人達は、北元につくことによって、明と北元の対立が深まり高麗国が最終的にはどちらの属国にもならずに独立国となれる機会であることを主張していた。一方の文人官僚達は、明に反発して潰されるよりも勢いのある明につくことが現実路線であるという主張であった。

そしてこの親明派と親元派の対立を利用したのが後の李氏朝鮮を建国した李成桂であった。李成桂は武人の代表である崔瑩（さいえい）に引き上げられて出世していたことから、武人の主張である親元派を表向き装っていた。その一方で李成桂は文人官僚達をも上手く取り込み文人からも評価を得ていた。

1387 年明は、一方的に高麗領の北方部分の返還を求めてきた。それに憤慨した高麗国王は、1388 年に明に対抗する判断を下し、流れは親元派優位となっていった。そして明に対抗すべく高麗国王は遼東地域（現在の中国遼寧省）に軍を派遣し、その際の将軍が李成桂であった。

李成桂は 38,000 人の軍を率いて、鴨緑江河口の威化島に到達し、川を渡って明に攻め入る計画に基づいていた。しかし、李成桂は明と対峙しても勝ち目はないことと、文人官僚同様に現実路線で明につくことが賢明と考え、高麗国王に何度も撤退を申し入れたが認められず、李成桂はクーデターを決意したのである。

李成桂率いる軍は、引き返し高麗国の首都である開京に攻め入った。これが「威化島回軍」と呼ばれる、国王を処刑、廃位へと導いたクーデターである。

そして 1392 年、李成桂は自らが王となり、「李氏朝鮮」を成立させたのである。ここで高麗国は滅亡した。

明朝成立後即ちモンゴル帝国が北へ帰り北元となってから、高麗国内では親明派と親元派が対立し、結果親明派が勝利したのだが、親元派が勝利し北元が大きな力となっていったならば、モンゴル帝国は再び支配を拡げていたのであろうか。

勿論、歴史には事実しか存在しないのであるが、威化島回軍が高麗国の分岐点であったと同時に北元にとってもまた分岐点であったといえる。

第 1 項 歴史上の分岐点

第 1 項にて述べた通り、李成桂の判断による威化島回軍が、大明帝国の維持力向上に繋がり、その後の朝鮮の歴史に於いても大きな分岐点となったといえる。同様に、歴史上の事実が振り返ると分岐点であったといえる事象は存在する。

2019 年のフィールドワークにて訪れた、九州大学人文科学研究院・森平雅彦教授の言葉によると、モンゴル帝国・元朝時代に高麗国が元に完全に支配された直轄領となるのではなく、独自国家として生き続けたことに関して、「高麗王朝の判断が誤っていたら、現代において朝鮮半島は、中国の一つの省になっていたかも知れない」という見解であった。この言葉から、当時の高麗王朝の判断が分岐点であったと感じたのである。
また、西南学院大学・久芳崇非常勤講師による「元寇と火器の時代」の講義に対して、筆者は以下の疑問を投げかけたのである。

「16 世紀末の豊臣政権による朝鮮侵略において、明朝が脅威とした日本式鉄砲の導入を図るべく日本人捕虜を鉄砲部隊として編成し、東北の女真族（のちの満州族）との戦いに活用したという事実に対して、日本人捕虜が当時の北元（モンゴル族）との戦いにも活用されたことはなかったのか」という疑問である。
久芳氏の回答は、「当時は女真族や西南方面との戦いに活用されており、北元と日本人捕虜は交戦していない」とのことであった。

筆者は、モンゴル帝国滅亡後の北元と日本人との大陸における交戦による接点も、可能性としてあり得たのではないかと、歴史の分岐点というものを感じたのである。一方で、歴史はあくまで事実が唯一であることも冷静に理解しなければならないのである。

第６節　清（満州人）によるモンゴル統治

モンゴル帝国の華々しい時代が過ぎ去ったあとの「清」の時代のモンゴルの歴史である。清王朝は、17 世紀半ばから 1912 年まで中国全土とモンゴルを支配した。その母体は、中国東北部の満洲で、1616 年に満洲人（女真族）が建国した「後金（こうきん）」である。後金はその後、中国全土とモンゴルを手中に収め、国名を清と改めた。すなわち清は、満洲人が、中国に住む漢民族（漢人）とモンゴル人とを支配した「征服王朝」である。

モンゴル人は遊牧民で文字史料をあまり残していないのである。そもそも文字を持たなかった期間も長く民族に伝わる歴史や社会規範などが口伝で子孫に継承されることが多かったと考えられるのである。ウイグル文字をもとにしてモンゴル文字が制定されたのはチンギス・カーンの時代のことで、モンゴル文字による当時の記録といえば、印章や石碑などに刻まれてわずかに現存する程度である。チンギス・カーンやその子孫が築いたモンゴル帝国時代においても、モンゴル語史料だけではとても研究にならず、漢文やペルシア語による同時代史料と突き合わせ、ようやく当時の様相がおおまかに浮かび上がってくるのである。

だが、17 世紀以降、清に支配されたモンゴルでは事情が異なっている。清は漢人王朝のやり方に倣い、文書行政を行っていたのである。そのやり方は、清に服属したモンゴルにも持ち込まれ、モンゴル語で文書行政が行われたのである。このため、清代のモンゴル語の公文書がたくさん残されているのである。豊富に残された史料のおかげで遊牧民の社会

が直接見えてくるのである。どういう統治をして、それがどのような政治的行動に結びつくのか、細かいところまでわかるのである。

清代モンゴル語の公文書を読み解いていくと、清のモンゴル統治のあり方が見えてくるのである。清は満洲人による征服王朝だが、中国本土で漢民族を支配するため漢民族による王朝であった「明」の行政制度を一部継承し、漢民族が使用する漢語を公用語として使用していたのである。支配地域であるモンゴルも、中国全土と同じ方法や言語で統治した方が効率がよさそうだが、当時の史料を見るとモンゴルを中国全土とは異なる方法で統治していたことが分かるのである。それを端的に示すのが、行政文書に漢語を使わず、満洲語とモンゴル語を使っていたことである。満洲語とモンゴル語は言語的に近く、モンゴル人にも満洲語は学びやすい言語であったのである。一方、伝統的に学校制度を持たないモンゴル人にとって、漢語や漢字の学習は非常に困難だったのである。そして清の皇帝は満洲語と中国語とモンゴル語に通じ、通訳を介することなく帝国全土の政治状況を把握していたのである。

さらに清は、漢民族が住む中国本土とモンゴルとで、統治の方法も変えていたのである。漢民族が農耕定住を基盤とするのに対し、モンゴル人は定住せずに遊牧を行う慣習がある。清はモンゴルで、遊牧社会に適した統治を行っていた慣習がある。

そもそも遊牧社会のモンゴルには、子供が成人すると家畜や財産を分けて独立させる慣習がある。独立した子供は自立した経営単位を形成し、小さな単位に分かれていく。そのためモンゴルでは、このように流動的な小規模集団を束ねるために適した統治方法がとられていた。モンゴルの君主（ハン）は、民族すべてを直接統治するのではなく、小規模集団ごとに自治を任せ集団間で利害が衝突する場合に調整役を務めていたのである。

清の皇帝はその方法をふまえ、モンゴルを専制的に直接統治するのではなく現地のモンゴル貴族の領主に統治を行わせたのである。領主はモンゴル語で現地を統治する一方で、中央政府への報告や皇帝への上奏をおこなう際には満洲語を使った。さらに清は、漢民族が住む中国本土とモンゴルとで、統治の方法も変えていた。漢民族が農耕定住を基盤とするのに対し、モンゴル人は定住せずに遊牧を行ため、清はモンゴルで遊牧社会に適した統治を行っていたのである。そのおかげで、満洲語とモンゴル語の資料が今も大量に残っているのである。漢語ではなく、満洲語やモンゴル語で書かれた史料で研究できる意義は大きい。漢語で書かれた史料には、漢文化のバイアスが否応なくかかっているのである。そうした色眼鏡なしに、当時のモンゴルで暮らしていた人たちの視点で、モンゴル社会の実像に迫ることができるのである。

このような清のモンゴル統治のあり方を踏まえると、ひとつの大きな疑問が湧き上がってくるのである。小さな集団に分かれていく力学を持つ遊牧民が、なぜ 13 世紀には一致団結して他国を圧倒する征服戦争を行えたのだろうか。そのヒントは、狩りのスタイルにあると考えられるのである。遊牧民は大掛かりな「巻狩り」を行う。これは大勢で狩り場を四方から取り囲み獲物を追い込んで捕える形態の狩りのことである。この狩りを成立させるには、一糸乱れぬ行動をしなければならない。そうでないと、獲物が逃げてしまうため非常に組織的な行動が求められたのである。狩りで得た獲物は、狩りを主催したハンによ

って、参加者に公平に分配される。遊牧民は狩りのときにまとまり、普段は調整役であるハンの強い権力が表に出てくるのである。これは軍事行動にも言えることである。ハンの下にまとまり敵に勝利すれば、戦利品は公平に分配されるのである。普段は小さな単位で自立しているが、大きな利益が見込めるときは一致団結するのである。ここには遊牧民の統合の契機があり、清代の史料を丹念に読み解くと、モンゴル遊牧民の社会における分散と統合の契機、社会のガバナンスのあり方、清朝の統治の巧妙さが見えてくのである。

歴史の実像に迫るカギは、「書かれていないこと」にある。歴史研究を通じて何が「見えてくる」のかである。

清代モンゴル研究をもとにして、近代の東北アジアについても確固たる見方を持つと 19 世紀の末から 20 世紀半ばにかけて日本は大陸に進出し、アジア諸国と関わり、そうした経緯やそこで起こったいろいろな事件は、多くの場合、日中関係史の枠組みのなかで論じられることがわかってくる。ところが、日中関係の間には、モンゴルが存在しているのである。当時の東北アジアを論ずるうえで欠かせない「満蒙」というキーワードは、満洲とモンゴルのことを指しているのである。当時の日本は満洲とモンゴルを常に意識しており、両地域の存在は、東北アジアの国際政治の焦点だったのである。1912 年に清が滅亡すると、広大な領土と多様な民族をまとめることができなくなり、それを契機にモンゴルで独立の機運が高まった。そこに絡んだ日本やロシアの進出は、「モンゴル問題」という形をとったのである。清代のモンゴルのあり方を踏まえて考えれば、モンゴルの歴史的な事情や構造が日本やロシアの動き方を決定していたと言える。資料から得た情報が全体として集まったときにどのような理解に至ることができるか。「わからないことがわかる」。それを積み重ねることで、物事に対する見方が変わることが歴史研究の面白さであることを体感できたのである。中国王朝としての清とは全く違った、モンゴルにおける清がここに示されていたからである。中国語の史料にもとづいた清朝研究では見えないものが、モンゴル語の資料から見えてくるのである。「漢文」の世界の研究者には、それが目新しく映ったのかもしれないのである。歴史研究それ自体は、現代の政治や外交の問題を特効薬的に解決するわけではないのである。だが、歴史研究で用いられる手法や視点は、現代を生きる私たちの助けにもなるはずである。歴史研究の手法とは要するに「膨大な情報群から必要なデータを探し出し、全体像を俯瞰する」ことである。大量の情報が溢れる現代においては、情報を見極める一人ひとりの力が問われているのである。

第 7 節　モンゴル帝国の統治と一帯一路政策

元の社会はモンゴル語を筆頭に、漢語、ペルシャ語、ウイグル語、チベット語などユーラシア各地の諸語・諸字がとびかう多言語社会だった。（中略）高麗には禅僧、チベット仏僧、道教の道士など大陸の様々な宗教者が訪れた。（中略）モンゴル風のファッション（故服）とヘアスタイル（弁髪）も、強制はされなかったが、国王をはじめ一定の広まりを見せたらしい。

近年はモンゴル帝国史の見直しが活発に進められ、その世界史的な画期性が指摘されている。モンゴルを野蛮な破壊者とみなす論調はかげをひそめ、モンゴル政権下における多

様な文化の高揚と経済の活況、ダイナミックなヒト・モノ・情報のうごき、ゆるやかな統治のもとで国際化した社会の多様性や開放性などが強調されている。（森平、2011）

今回の論文を通し、モンゴル帝国のファジーともいえる統治方法と、国としての格を保ちつつその統治を受けた高麗について深く知ることができた。

高麗は、国としての格を保つために、自身の価値をいかにして打ち出すかを冷静に見極め、その価値を元に対し適確に表現することで国家としての独自統治を認めさせるしたたかさを持っていた。

現在の中国の「一帯一路」政策は「中華民族の偉大な復興」という、一見政治的な枠組みではなく「民族の団結」に焦点を当てているように感じる。これは元が周辺地域の宗教や言語のゆるやかな統治のもとで国際化してきたファジーな関係を想起させた。しかし実態は、元が通商を活性化し、経済の発展に注力していたように、現在の中国も全世界6,000人ともいわれる華人・華僑をも巻き込んだネットワーク戦略で経済的優位を図っている。

ただ、ここにきて「逃亡犯条例」の改定に端を発した香港の抗議デモがこの政策の大きな障害となっている。天安門事件当時の状況と現在の違いはSNS普及により、中国政府にとっては不都合なこれらのニュースを国民が知るチャンスがある点といえるのではないだろうか。

天安門事件当時、ある日系企業の在北京建設現場事務所では日本人を含め現地スタッフ全員が一切の外出を禁じられ、ホテルで1週間缶詰だったとの話を聞いた。もちろんテレビ・ラジオなどで情報を取ることもできず、当時はまだパソコンも携帯電話もない時代、完全に陸の孤島状態で、日本側からのコンタクトも大変な苦労をしたそうだ。

しかし現在は香港での警察との衝突、香港人同士の小競り合い、ののしりあい、どの勢力に与しているか色分けされた飲食店マップなど、驚くほど様々な情報がネットにあふれている。直接中国内でこれらの情報を得ることはできないと思われるが、旅行中のテレビや新聞などで自然と知る機会もあろうし､もちろん香港への旅行者は直に目にすることも　あるはずだ。もちろん一帯一路政策で呼びかけられた多くの華僑・華人はすべてを目にしている。2012年の著書「大中華圏」の中で寺島実郎氏は「中国にとって大中華圏は諸刃の剣」と述べ、中国が中華民族の団結を核とした中国と香港・台湾・シンガポールなどを含む大中華圏と中国の関係を述べていたが、この諸刃の剣がまさに中国を苦しめ始めている。

図 14　2019 年 6 月 16 日のデモ
香港・ヴィクトリア公園付近
出典：筆者撮影

モンゴル帝国のゆるやかな統治にも栄枯盛衰があったが、中国の一帯一路はまだどのような経緯をたどるのか行く末は判然としない。一つの国家による国を超えた民族の団結がどのような流れを作っていくのか、引き続き注視していきたいと考える。

以上のような周辺環境の中で、中国の隣国としての日本に住む日本人の今後についてさらに考えたい。

東南アジア諸国における各市況においても中国の覇権は明白である。一つの例として、建設業界においてもインド西南の島国モルディブにおいても中国とインドと覇権争いを上げたい。中国が島間の橋梁建設に投資を行えば次の投資はインドが行う、それぞれがいかに投資を広げていくのか、追いかけっこな状況となっている。そんな中、日本では数年前に大使館を置くという展開。時期の早晩だけが問題ではないが、官民ともにスピード不足の感がある。

つまり未開の市場を開拓するという同じことをしていてもスピードやパワー、ましてや民族というネットワークには十分な太刀打ちができない。

人財のダイバーシティ化が進み、日本国内での外国人労働者も増加し、また日系企業の海外進出も勢いが衰えたとはいえ今後も続いていく。多国籍のスタッフの中で、どのように日本人としての存在感を必要な時、必要な場で発揮することができるのか、もしくは今後も日本人でないとできない何かが残されているのか。
これからの日本がしなやかな思想でいかにしてアイデンティティを発揮していくのか、自分たちの価値がいかに発揮できるのかを今後の課題としたい。

結論

本研究では、「モンゴル帝国と朝鮮半島」の論題の下、モンゴル帝国に支配の過程で吸収・合併（西夏、金、南宋など）された国・地域がある中で、なぜ、高麗は、長期にわたり政体を維持し得たのか、また、その要因にはどのようなものかについて分析を行った。その結果、高麗が長期にわたり王朝を存続し得た背景の中には、(1)大国のパワーポリティックスに対する小国の対応のあり方、(2)世界を知る高麗商人と高麗経済、(3)儒教を根底とする小国としての生き方、の 3 点が、王朝存続に持続可能な「弱者の論理」として王朝存続に重要な役割を果たしてきたことが明らかになった。

こうした歴史認識の背景には、中華帝国としての正統性を現わす「冊封体制」の統治原則に則り、モンゴル帝国は、その世界の「中心」としての中華（中国､モンゴル帝国）とその「周縁」としての夷狄（朝鮮、日本、東南アジア諸国）との間において君臣等の関係性が存在していた。朝鮮半島など周縁地域の弱小国・地域にとっては、モンゴル帝国の安全保障システムの庇護の下、朝貢による経済的恩恵などは、朝鮮王朝の政体維持に不可欠であった。こうした歴史経緯は、これまでの共同研究において確認してきたとおりである（図 15 参照）。

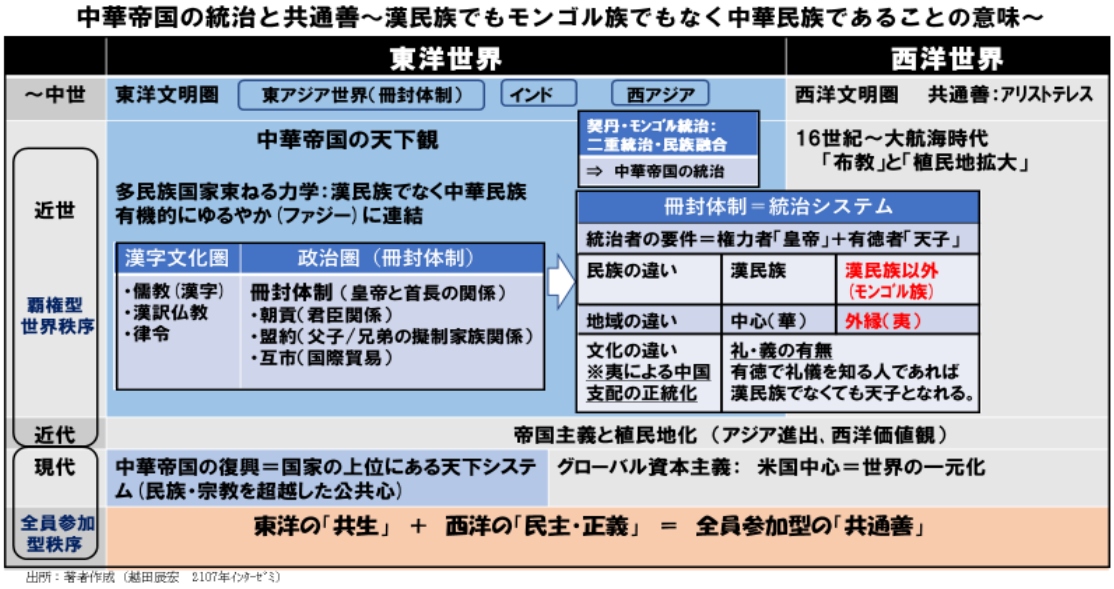


図 15　中華帝国の政体（2017 年多摩大学ｲﾝﾀｰｾﾞﾐ論文）

高麗王朝以降の朝鮮半島の国際政治においては、近隣国の大国・強国から領域を侵入・侵略を受ける歴史が常態化されていた。そのため朝鮮半島の王朝は、長く政体を存続し続けるために、支配国から朝鮮王室の人質、貢物（奴隷・馬・毛皮等）の要求受け入れることを余儀なくされる一方で、数々の従属国の中でも、中華王朝の中心に近い位置を占めることを重要な任務と考え、支配国への恭順な姿勢と積極的な支配システムを受け入れる一面もあった。こうした政治的思考や行動は、例えば、事大主義[2]であり、小中華思想[3]であり、役人社会（両班[4]：中国の科挙制度を模倣）などの政治体制を形容する言葉として言い表される。

また、歴史認識というものは、どのような形で現実の政治に作用するのであろうか。歴史が現在の政治に影響を与えているとする[5]とするならば、「（モンゴル帝国と高麗の関係性の歴史は、）現在の韓国政治とどのような共通点があり、どのように活かすことができるか」という問題意識に対する処方箋の一つになるものと考えられる。

こうした観点を踏まえ、韓国の歴史と類似的政治体験を持つ国との間で比較分析を行うことは、歴史認識を立体的視界から検証する一助になるものと考え、世界の現行政治制度を調べた結果、韓国とフランスの政体が類似している（表１参照）ことが明らかになった。

表 2　関係国の政治制度

国名	政体	制度	国家元首	国会・議会
フランス	**共和制**	**半大統領制[6]**	**大統領**	二院制
韓国	**共和制**	**半大統領制**	**大統領**	一院制
ドイツ	連邦共和制	議院内閣制	大統領	二院制
アメリカ	連邦共和制	大統領制	大統領	二院制

出所：各種資料をもとに著者作成

モンゴル帝国支配下の高麗時代（918-1380 年）は、現在の韓国にとって忘れたい歴史の暗部であり、それは、ナチス・ドイツ支配下のフランス・ヴィシー政権時代（1940-1944 年）においても同様な類似的歴史体験でもある。Paxton(2004)によれば、フランス・ヴィシー政府は、ドイツ・ナチスの指示に積極的に迎合した事実、特記すべきことは、ヴィシー政権が独自にユダヤ人迫害を行った事実を明らかにし、これらの論点にフランス人は不

[2] 自主性を欠き、勢力の強大な者へ付き従って、自分の存立を維持するやり方『広辞苑』
[3] 朝鮮を中国と文化的同質性を持った(小中華)と自負し､他を夷狄(未開民,野蛮人)視した思想『ﾌﾞﾘﾀﾆｶ国際百科事典』
[4] 高麗･朝鮮王朝時代の官僚組織。封建的土地所有、兵役･附役免除の特権を持つ身分階級『大辞林第三版』
[5]「歴史は過去の政治であり、政治は現代の歴史である」John Robert Seely『英国膨張史論』平凡社、1930 年
[6] 大統領制(国民直接選挙)と議院内閣制(首相･内閣を議会選出)の両方取入れた政治体制。ﾃﾞｼﾞﾀﾙ大辞泉

快感を隠しようもないと述べている[7]。また、渡辺(1994年)[8]によれば、ナチス・ドイツ協力のヴィシー政権が導入した老齢年金や家族手当など一部の制度は、形を変えて存続し、戦後のモネ・プラン[9]に対するヴィシー政権政府の経済政策との類似性を指摘している。このように、支配国への積極的な服従・同化政策とともに、支配下の属国時代の政権の制度や経済政策の形を変えて運用していたことが明らかになっている（表 3、表 4、表 5 参照）。

表 3 高麗、李氏朝鮮時代の政治制度

朝鮮王朝、年	宗主国	特徴
高麗 918-1380	中華･モンゴル帝国[元]	･事大主義(小が大に付き従い自分の存在を維持) ･日和見主(形勢を見て有利な側方に追従) ･小中華思想(文化的優越主義思想) ･役人社会(特権的支配者階級)
李氏朝鮮 1392-1910	中華･清王朝	

出所：著者作成

表 4 戦後の韓国の政治制度[共和制]

韓国共和制、年	体制 元首・大統領等	特徴
第一共和制 1948-1960	大統領中心制 李承晩	終身大統領→学生革命で崩壊
第二共和制 1960-1961	議院内閣制	大統領は象徴的元首→軍事ｸｰﾃﾞﾀｰで崩壊
軍政 1961-1963	朴正熙：軍政トップ	民政移管
第三共和制 1963-1972	大統領中心性[任期限定付] 朴正熙（軍出身）	改憲して３期［独裁強化］
第四共和制 1972-1980	民主集中制的大統領 朴正熙（軍出身）	終身大統領→1979年暗殺→民主化動き→軍介入
第五共和制 1980-1987	大統領中心制[大統領間接] 全斗煥（軍出身）	非民主的政権を再整備→1987年民主化宣言
第六共和制 1988-	大統領中心性[任期限定付] 盧泰愚:軍出身、金泳三、金大中、盧武鉉、李明博、朴槿恵、文在寅	５年ごとに国民の直接選挙で新大統領を選出、再任禁止、不安定な政局。

出所：磯崎典世(2015)「韓国政治と日韓関係」、木村幹(2004)『韓国における大統領中心制の定着：「民主化」と文化の関係を考える手がかりとして』神戸大学会議発表論文をもとに著者作成

[7] Robert O. Paxton 訳 渡辺和行、剣持久木(2004)『ヴィシー時代のフランス　対独協力と国民革命 1940-1944』柏書房

[8] 渡辺和行『ナチ占領下のフランス 沈黙・抵抗・協力』講談社、1994年

[9] フランス再生計画。ドイツの石炭・鉄鉱石等の資源を活用してフランス工業生産を高める計画。

表 5　最近のフランスの政治制度

	政治体制	その他
第三共和制 1870-1940	・議会権限が強く大統領は儀礼的存在。 ・内閣権力脆弱。70 年に 100 超の内閣交代。	・「自由・平等・友愛」の共和制の理念。 ・共和制を支える国民相互の社会連帯。
ヴィシー政権 [ナチス・ドイツ支配] 1940-1944	・休戦協定・対独協力。 ・**元首は立法・行政・司法の統治権集中**ファシズム体制。保守的思想:第三共和制・啓蒙思想・フランス革命精神反対。	・「自由・平等・友愛」国是否定。 ・「労働・家族・祖国」置換の国民革命。 ・地方分権・教会・家族回帰。中央集権と統制。
第四共和制 1946-1958	・議会権限が強く内閣権力脆弱。 ・11 年に 21 内閣交替。 ・ヴィシー政権継承として認知されていない。	・ヴィシー政権の老齢年金・家族手当等を形変え存続。 ・ヴィシー政府経済政策類似性。
第五共和制 1958- 現在	・**大統領権限を大幅強化**。 ・議会権限縮小。行政・官僚機構強力。	

出所：著者作成

本研究の貢献としては、フランスと韓国との両国との政治制度において基本的類似構造を明らかにした点があげられる。それは、第１に、過去隣国から従属を強いられた歴史的屈辱の時代（ナチス・ドイツ支配下のフランス、モンゴル帝国視下の高麗など）、第２に、その属国時代における積極的な事大主義行動（自主的ユダヤ人迫害のフランス、小中華思想の朝鮮）、第３に、属国時代と現行政治との制度・政策の類似性（学歴・役人社会、君主・大統領制）が見られることである（表 6 参照）。知見としては、国家存亡など有事の際、弱者の論理や行動には、東西社会という文化・領域を超えて一定の共通性が見られる可能性を示唆することができると考えられる。

表 6　フランスと朝鮮半島との政体比較

フランスと朝鮮(韓国)との政体比較

	フランス	朝鮮(韓国)
属国時代	対ナチス・ドイツ支配下のヴィシー政府 [1940-1944年] ・元首の三権統治:ファシズム体制 ・積極的協力:ユダヤ人迫害、日和見主義 ・役人社会→次政権でも地位確保	元朝支配下の高麗 [918-1380年] 清朝支配下の李氏朝鮮 [1392-1910年] ・事大主義(小が大に付き従う)、日和見主義 ・小中華思想 ・役人社会 [両班]:支配者階級
現行体制	共和制:第五共和制 ・大統領の権限強化: ボナパルティズム気質 ・議会の権限縮小 ・役人社会:官僚政治の国家	共和制:第六共和制 ・大統領に大きな権限 ・役人社会:権力と腐敗

特徴:
○支配国への積極的服従・協力(歴史の暗部)、事大主義、日和見主義
→国内政治の基盤強化目的: 忠烈王 [在位1274-1308]、ﾓﾝｺﾞﾙに日本侵攻を働きかけ『高麗史』
○制度・経済政策は時代を超えて運用
→役人社会、戦後フランス共和制は、ナチス下のヴィシー政権時代の制度・経済政策を形変えて運用

出所:著者作成(越田展宏2019)

今後の課題を挙げたい。これまで長い歴史軸から見た中華・モンゴル帝国の興隆と衰退、朝鮮半島との関係性をみてきた。今後は、これまで 3 年間の共同研究結果を踏まえて、日本との関係性を統治、経済・経営などの観点から分析する必要性があると考える(表 7、表 8)。

表 7　モンゴル帝国の盛衰要因:統治・経済と経営

グローバルヒストリーからみた中華・モンゴル帝国の盛衰要因－統治・経済と経営－

世紀	World Economy Forum ﾄﾞｲﾂ	Society 5.0 日本	Globalization 3.0 ﾌﾘｰﾄﾞﾏﾝ	統治、経済 ①富と手段 ②推進力と原動力	経営 ○担い手、経営手法
		Society1.0 [狩猟社会]			
13-14C モンゴル帝国 高麗 [10-14C] 17-20C 清帝国 李氏朝鮮 [14-20C]		Society2.0 [農耕社会]	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾘｾﾞｰｼｮﾝ1.0 [大航海時代]	略奪の経済 ①貴金属、絹、香辛料⇒略奪 ②腕力、馬力、風力⇒軍事力	国家 ○経営者の社会的ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨｰが直接経営反映 →「中小企業経営」×失敗
18世紀後半～	第１次産業革命 [軽工業,機械化]	Society3.0 [工業社会]	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾘｾﾞｰｼｮﾝ2.0 [産業革命と工業化]	規模の経済 ①農産物,鉱物,工業品 [有形財]⇒貿易・直接投資 ②鉄道,自動車,電話,衛星,PC [アナログ]⇒国際協定 [GATT]	多国籍企業 [大企業] ○経済性重視の制度化された戦略 ○有形財 →「大企業経営」
19世紀後半～	第２次産業革命 [重化学工業]				
20世紀後半～	第３次産業革命 [インターネット,ITC]	Society4.0 [情報社会]	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾘｾﾞｰｼｮﾝ3.0 [ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ情報社会]	範囲の経済 ①知的財産、サービス [無形財]⇒国際経営・グローバル経営 ②インターネット、バイオテクノロジー [デジタル]⇒国際機関 [WTO]	多様な主体 [大企業、中小企業、個人事業] ・無形財 [知的ｻｰﾋﾞｽ] →大企業,中小企業、個人経営
21世紀～	第４次産業革命 [IoT、汎用AI]	Society5.0 [ｻｲﾊﾞｰ空間とﾌｨｼﾞｶﾙ空間を高度融合]			

出所:著者作成(越田展宏2019)

表 8　モンゴル帝国に関する歴史評価と経営評価

モンゴル帝国の興亡に関する歴史的・経営的評価

	歴史的評価	経営的評価
興隆/成長の要因	○ｶﾘｽﾏ的ﾘｰﾀﾞｰ：ﾁﾝｷﾞｽ・ｶｰﾝ、ｸﾋﾞﾗｲ・ｶｰﾝ ○組織力と結束力 ○多様性に寛容な統治（宗教・部族） ○薄い祖国ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ ○世界初国家保証の不換紙幣発行 ○遠距離貿易発展	○ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ論の変遷（特性論、行動理論、条件適応論、ｶﾘｽﾏ的、ｻｰﾊﾞﾝﾄ型、変革的ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ） →起業家精神を持つ国際リーダー人材 ○世界上位100の経済体の半数は国家でなく企業 →経済主体は、中小企業や個人企業のサービス・アイデア中心としたグローバル市場展開
衰亡/破産の要因	●皇帝の後継者問題 （合議制→人選争い、皇帝の資質） ●政策の非継続 ●曖昧な管理・規則→国体・財政悪化 ●大陸の帝国 （水上輸送と比べ高ｺｽﾄ多時間） →大航海時代へ	●破壊的ﾘｰﾀﾞｰ論：愚帝、暗君の悪徳ﾘｰﾀﾞｰを反面教師に、優れたﾘｰﾀﾞｰは何をしてはならないか教訓 ●企業倒産に導く最大理由： ①安易な現状是認、②企業内官僚主義（前例、無謬、形式、無責任、天下り、無作為・無過失、身分主義）、③理念・文化もなく金儲け集団

※ 経営 ＝ 環境（外部環境、内部環境、ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ手法）×資源（ｶﾈ、ﾓﾉ、ﾋﾄ、情報、時間）

出所：著者作成（越田辰宏2019）

最後に

モンゴル帝国に関する研究は今年で 3 年目となった。2017 年に「モンゴル帝国のユーラシア興隆史」として、モンゴル帝国の成功要因について研究した。2018 年は「モンゴル帝国の興隆と衰退」をテーマとしてモンゴル帝国の失敗の原因について研究した。今年はモンゴル帝国の傘下に入った国として高麗にフォーカスを当てて研究をすることとなった。一昨年、去年に続き通じて得られた示唆について述べたいと思う。

2017 年のモンゴル帝国研究においては、モンゴル帝国が現代にもたらすものとして、「経済連携」による「平和と安定」として、リーダー（チンギス・カーン）の「思想」と「視野」として、イル（仲間）になるという、思想や多様性を受容してきたことがあることがわかった。

2018 年のモンゴル帝国研究においては、現代にもたらしたものとして、行政制度や北京の都市プランなどのソフト面を遺しているという点と、彼らのアイデンティティが薄いゆえに世界統一できたという新たな発見があった。また、この時に歴史は繰り返すという示唆を得られた。これは、モンゴル帝国のような緩やかな統治の限界につながるものでもある。また、縮小過程における生き方や、リーダーの資質によりガバナンスの低下を招くという点も判明した。

さきの 2 年間で大国であるモンゴル帝国について研究をしてきたわけであるが、一方、大国（モンゴル帝国）の傘下に入った高麗はどうだったのか。高麗は、モンゴル帝国のような薄いアイデンティティではなく、モンゴル帝国を始め北方諸国に侵略され、周辺諸国と交わることでアイデンティティを確立していった。一方で、儒教を始め、周辺諸国の文

化を取り入れていくほか、さらには傘下に入ったのちは抵抗ではなく自らの価値を最大化し生き延びる道を模索する柔軟性も併せ持っていた。

高麗は柔軟な思考を持って、諸外国に抵抗を重ね続けた結果、強固なアイデンティティを持つに至り、結果として、モンゴル帝国のような大国に侵略され傘下に入りながらも国家の姿を保ち続けることができたのではなかろうか。

現代においても、大企業に相対し勝ち抜いていくためには、一つの戦略ではなく、状況に合わせて柔軟に戦略を変えつつも、現在の戦略に全力を注ぐということが重要な示唆であろうと考える。

参考文献

〈論文〉5本

1. 寺島実郎『大中華圏とモンゴル、その世界史へのインパクト』(『世界』第907号(2018年5月号)、岩波書店,2018)
2. 岡田英弘『世界史の中の大清帝国』(岡田英弘編『清朝とは何か』,2009)
3. 金 貴東『歴史・文化・産業都市の開城』(日本貿易振興機構アジア経済研究所『アジ研ワールド・トレンド』第236号、特集「朝鮮半島の都市」,2015)
4. 佐立治人『元朝の立法・刑罰・裁判』(関西大学法学論集,2016)
5. みずほコーポレート銀行『Mizuho Industry Focus vol.89 純粋持ち株　会社体制におけるグループ経営上の落とし穴』(,2010)

〈著書〉76冊

1. 寺島実郎『寺島実郎の時代認識資料集　2019年夏号』(寺島実郎事務所,2019)
2. 寺島実郎・渡辺利夫・朱建栄『大中華圏―その実像と虚像』(岩波書店,2004)
3. 寺島実郎『大中華圏―ネットワーク型世界観から中国の本質に迫る』(NHK出版,2012)
4. 麻生川静男『本当に悲惨な朝鮮史』(KADOKAWA,2017)
5. 愛宕松男・寺田隆信『モンゴルと大明帝国』(講談社,1998)
6. 尹 龍爀『韓国における最近の三別抄遺跡の調査と研究』(韓国研究センター年報 第13号,2015)
7. 井上秀雄『古代朝鮮』(日本放送出版協会,1972)
8. 宇山卓栄『朝鮮属国史　中国が支配した2000年』(扶桑社,2018)
9. 岡洋樹、境田清隆、佐々木史郎編『東北アジア』(朝倉世界地理講座　第2巻,2009)
10. 岡洋樹『清代モンゴル盟旗制度の研究』(東洋書店,2007)
11. 岡田英弘『モンゴル帝国の興亡』(ちくま書房,2001)
12. 岡田英弘『世界史の誕生』(筑摩書房,1992)
13. 岡田英弘『世界史の誕生―モンゴルの発展と伝統』(ちくま文庫,1999)
14. 岡田英弘『読む年表 中国の歴史』(ワック,2015)

15. 岡本隆司『世界のなかの日清韓関係史 後輪と属国、自主と独立』(講談社,2008)
16. 岡本顕實『元寇 ： 世界帝国が攻めてきた. 国難。神風は吹いたか? 』(さわらび社,2013)
17. 沖大幹他『SDGs の基礎』(事業構想大学出版部,2019)
18. 小長谷有紀 著 『モンゴル』(『暮らしがわかるアジア読本』河出書房新社,1997)
19. 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』(朝日新聞社,1996)
20. 小和田泰経『朝鮮王朝史』(新紀元社,2013)
21. 金岡秀郎『モンゴルを知るための 60 章』(「エリアスタディーズ」第 4 巻、明石書店,2000)
22. 河上麻由子『古代日中関係史』(中央公論新社中公新書,2019)
23. 姜在彦『歴史物語　朝鮮半島』(朝日新聞出版、朝日選書,2012)
24. 木村幹『韓国における大統領中心制の定着：「民主化」と文化の関係を考える手がかりとして』(神戸大学会議発表論文,2004)
25. 高秉雲・鄭晋和共編『第 3 版『朝鮮史年表―前 60 万年-1991 年 12 月まで』』(雄山閣出版,1992)
26. 高秉雲・鄭晋和共編『朝鮮史年表』(雄山閣出版,1979)
27. 国際時事アナリスツ編『日本人のための朝鮮半島の歴史』(河出書房新社,2018)
28. 事業構想大学出版部『FACTFULNESS』(日経 BP 社,2019)
29. 芝山豊、岡田和行編『モンゴル文学への誘い』(明石書店,2003)
30. 斯波義信『中国都市史』(東京大学出版会,2002)
31. Jean - Paul ROUX (ルー) 『Gengis Khan etl'Empire mongol. PARIS』(Gallimard,2002)
32. ジャン・ポール・ルー著　杉山正明訳『チンギス・カンとモンゴル帝国』(創元社,2003)
33. John Robert Seely『英国膨張史論』(平凡社,1930)
34. 白石典之『モンゴル帝国誕生―チンギス・カンの都を掘る』(講談社、講談社選書メチエ,2017)
35. 菅沼晃『モンゴル仏教紀行』(春秋社,2004)
36. 杉山正明・弓場紀知・宮紀子・宇野伸浩・赤坂恒明・四日市康博・橋本雄『モンゴル帝国』(「NHK スペシャル文明の道」第 5 巻、NHK 出版,2004)
37. 杉山正明『クビライの挑戦』(講談社,2010)
38. 杉山正明『クビライの挑戦―モンゴルによる世界史の大転回』(講談社、講談社学術文庫,2010)
39. 杉山正明『クビライの挑戦―モンゴル海上帝国への道』(朝日新聞社、朝日選書,1995)
40. 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』(『興亡の世界史』第 9 巻、講談社,2008)
41. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡〈上〉「軍事拡大の時代」』(講談社、講談社現代新書,1996)
42. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡〈下〉「世界経営の時代」』(講談社、講談社現代新書,1996)
43. 杉山正明『ユーラシアの東西――中東・アフガニスタン・中国・ロシアそして日本』(日本経済新聞出版社,2010)
44. 杉山正明『興亡の世界史 モンゴル帝国と長いその後』(講談社,2016)
45. 杉山正明『大モンゴルの世界―陸と海の巨大帝国』(角川書店,1992)
46. 杉山正明『大モンゴルの世界―陸と海の巨大帝国　改訂版』(角川ソフィア文庫,2014)

47. 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』(講談社学術文庫, 2016)
48. 杉山正明『耶律楚材とその時代』(白帝社, 1996)
49. 杉山正明他『大モンゴルの時代』(中央公論社, 1997)
50. 田村実造『中国文明の歴史〈7〉大モンゴル帝国』(中公文庫, 2000)
51. 張東翼『モンゴル帝国期の北東アジア』(汲古書院, 2016)
52. 鄭晋和『朝鮮史年表』(雄山閣, 1992)
53. David O. MORGAN『The Mongols, Hoboken』(NEW JERSEY, 2007)
54. デイヴィド・モーガン『モンゴル帝国の歴史』(角川選書, 1993)
55. 東北亜歴史財団編、監訳者田中俊明、訳者篠原啓方『高句麗の政治と社会』(明石書店, 2012)
56. 冨谷至・森田憲司『概説中国史 下-近世-近現代』(昭和堂, 2016)
57. ハイシッヒ著、田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』(岩波書店, 2000)
58. 羽田正編『海から見た歴史』(東京大学出版会, 2013)
59. 藤田昇、加藤聡史、草野栄一、寺田良介編著『モンゴル―草原生態系ネットワークの崩壊と再生』(京都大学学術出版会, 2013)
60. 風戸真理『現代モンゴル遊牧民の民族誌―ポスト社会主義を生きる』(世界思想社, 2009)
61. 松川 節『図説 モンゴル歴史紀行』(河出書房新社, 1998)
62. 間野英二他『地域からの世界史ー第6巻 内陸アジアー』(朝日新聞, 1992)
63. 水谷健彦『急成長企業を襲う7つの罠』((株)ディスカヴァー・トウェンティワン, 2014)
64. 宮脇淳子『モンゴルの歴史―遊牧民の誕生からモンゴル国まで』(刀水書房、刀水歴史全書、第59巻, 2002)
65. 森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』(株式会社山川出版社, 2016)
66. 森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』(「世界史リブレット」第99巻、山川出版社, 2011)
67. 森平雅彦『モンゴル覇権下の高麗―帝国秩序と王国の対応―』(名古屋大学出版会, 2013)
68. 山本光郎『耶律楚材と中書省について』(北海道教育大学、人文科学・社会科学編, 2016)
69. 劉孝鐘(ユ・ヒョヂョン)、ボルジギン・ブレンサイン『境界に生きるモンゴル世界―20 世紀における民族と国家』(八月書館, 2009)
70. 楊 海英『逆転の大中国史 ユーラシアの視点から』(文藝春秋, 2016)
71. 李玉著、金容権訳『朝鮮史』(白水社, 2008)
72. Robert O. Paxton 訳 渡辺和行、剣持久木『ヴィシー時代のフランス 対独協力と国民革命 1940-1944』(柏書房, 2004)
73. ロバート・マーシャル『図説 モンゴル帝国の戦いー騎馬民族の世界制覇ー』(東洋書林, 2001)
74. 早稲田大学モンゴル研究所『モンゴル史研究―現状と展望』(明石書店, 2011)
75. 渡辺和行『ナチ占領下のフランス 沈黙・抵抗・協力』(講談社, 1994)
76. Walther HEISSIG(ハイシッヒ)『Ein Volk sucht seine Geschichte : die Mongolen und die verlorenen Dokumente ihrer großen Zeit. Düsseldorf』(Econ Verlag, 1964)

2019 年アジアダイナミズム班年間スケジュール

表 9　年間スケジュール　筆者作成

【メンバー】21名(うち教員3名)　①学部6名(杉浦、藤山、小出、和泉(遼)、押見、柳沢)　②院生8名(宮北、半田、越田、小西、北山、野々宮、山崎、浅賀)
③卒業生・修了生4名(光永・塚原・和泉(昌)、三好)　④教員3名(金先生・水盛先生・小林先生)
【担当】リーダー(宮北)、副リーダー(半田、杉浦)、議事録:輪番、スケジュール管理(宮北)

	月	日	議　題	文献 調査	フィールドワークFW	備　考	議事録
1	4月	13	初回学長講話				宮北
2		20	自己紹介・班検討				宮北
3		27	テーマ方向性	次回ベース文献疑問など報告	FW訪問先決定		宮北
4	5月	11	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		年間スケジュール	宮北
5		18	分担発表	文献集計・目次	FW訪問先決定		藤山
6		25	分担発表	文献集計・目次			小出
7	6月	1	分担発表				和泉(遼)
8		8	◎研究計画中間発表1日	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク		○○時集合	—
9		15	◎研究計画中間発表2日	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク		○○時集合	—
10		22	研究計画発表反省				柳沢
11		29	箱根合宿発表目次立て	中間発表に向けた討議			押見
12	7月	6	分担発表				野々宮
13		13	分担発表				半田
14		20	箱根合宿発表PPT確認				山崎
	7月		7/31(水)-8/1(木) 夏合宿(箱根)中間発表 合宿先 ： 箱根水明荘(箱根町湯本702) TEL.0460-85-5381(代) http://www.suimeisou.com/access/index.htm	●発表者(役割分担):1研究概要、2目次、3　内容、4参考文献・研究計画・FW ●日程案: (1日目) (2日目) (連絡:学長室　高野takano@tama.ac.jp)			—
	8月						—
		下旬	8月26-28日 福岡フィールドワーク	福岡を中心に、九州大学など訪問			—
							—
15	9月	21					光永
16		28	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			杉浦
17	10月	5	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			小西
18		12	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			北山
19		19	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			塚原
20		26	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			和泉(昌)
21	11月	2	PPT目次レビュー/分担確	各自完成版を持ち寄る			宮北
		9	講義なし(学園祭)			多摩大学学祭	
22		16	PPT目次レビュー/分担確	全体を印刷して確認			半田
		23	講義なし				
23		30	PPTレビュー				柳沢
24	12月	7	PPTレビュー				押見
25		14	アクティブラーニング(AL)祭	アクティブラーニング(AL)祭 (多摩キャンパス?)			
26		21	論文発表				宮北
27		23	論文提出日			メールで送付する期限	
28	1月	5	講義なし(冬期休業日)				
		11	2019年度最終講義				
29		18	センター試験(講義なし)				
30		25	論文提出/懇親会(年度最終日)	最終論文(完成版)提出日			

授業回数　計30回(前期:14回 後期:13回)

フィールドワーク報告

概要

今年のインターゼミアジア班は、モンゴル帝国と朝鮮半島をテーマに研究をしており、同時代にモンゴル帝国から侵攻を受けた福岡でフィールドワークを実施した。福岡は過去に朝鮮半島や中国大陸と非常に密接な往来があり、現在でも中国人、韓国人が数多く訪問している都市である。また、アジア史を専攻しておられる３人の講師をお呼びして九州大学において講義していただくことが出来たことも本フィールドワークの成果であった。

スケジュール

8 月 26 日(月)～8 月 28 日(水)
8 月 26 日(月)元寇資料館、筥崎宮
8 月 27 日(火)福岡市博物館、九州大学伊都キャンパス
8 月 28 日(水)九州国立博物館

参加者（敬称略）

合計　15 人
学部生：杉浦、和泉（遼）、小出、柳沢、押見
院生：宮北、半田、浅賀、野々宮
OB：光永、和泉（昌）、塚原
教員：金先生、水盛先生、バートル先生

報告

（ア）　　元寇資料館

日蓮聖人銅像護持教会の一角にある資料館。通常営業はしておらず、観覧には事前予約が必要。展示物としては元寇の際に使われていた武器・防具や、元寇に関する資料、特に朝鮮半島・大陸から福岡へ上陸するまでの軌跡が分かりやすく説明されていた。また、日蓮に所縁のある資料が展示されていた。

図 16　8 月 26 日　元寇資料館にて　撮影　バートル先生

（イ）　　筥崎宮

筥崎宮は平安時代中期に、醍醐天皇が「敵国降伏」の宸筆を下賜され、筑前大分宮より遷座したという。以後の天皇も納めており、例えば元寇により炎上した社殿の復興にあたり、亀山上皇も納めている。元寇の際に神風が吹き未曾有の困難に打ち勝てたことから、厄除け・勝運の神として有名になった。

この「敵国降伏」の意味とは、敵国を打ち負かすと言う意味ではなく、「敵国が我が国の優れた徳の力により、自ずからに靡いてくる」ことであり、武力により天下を統一する「降伏敵国」とは意味が異なるとの説明があった。

図 17　8 月 26 日筥崎宮にて　水盛先生撮影

（ウ）　　福岡市博物館

博多駅からバスまたは電車で 30 分ほどのところに設立された市営の博物館であり、福岡の歴史に触れることが出来た。特に、周辺には元寇の防塁跡地が残っていて（残念ながら今回のフィールドワークでは雨天により訪れることが出来なかった）。

また、福岡が昔から朝鮮半島と中国大陸の窓口として機能していた点について、認識を再確認出来た。

（エ）　　九州大学伊都キャンパス

以下の３名から講義していただくことが出来た。

① 九州大学 人文科学研究院 歴史学部門 朝鮮史学講座
森平 雅彦 教授
高麗史を中心にモンゴル帝国・元との関係について

② 九州大学 比較社会文化研究院 社会情報部門 歴史資料情報講座
伊藤 幸司 准教授
日本の鎌倉・室町時代の国際貿易、特に福岡の役割について

③ 西南学院大学　国際文化学部
久芳　崇 講師
室町・戦国時代における中国および東アジア地域の武器の歴史について

① 森平先生

高麗を研究する意義とは、「大国」のパワーポリティクスに対する「小国」のあり方すなわち小国論に関するものである。特に朝鮮の王朝は寿命が長いという特徴がある。

元寇の際の立ち回りとして、モンゴル帝国から戦争参加を服属の証として重要視され他にも関わらず日本攻めについて拒否をしてきたという経緯があった。日本に対しても、日本を自身より格上の表記、元と同格の表記を行って日本へ書状を送っている。

一方、参加しなければいけないのであれば、主導権を握ろうという判断が働き、高麗から元に対して日本侵攻の提案をしつつ高麗の王が司令長官に就任して元軍をも指揮する立場を手に入れた。

大理や天山ウイグルは、高麗と同じようにモンゴル帝国に組み込まれて行ったが、高麗とは異なり国家の枠組み自体が消滅した。何が異なるのか。高麗はモンゴル帝国において、上記の対日戦略上の貢献が評価されたことが大きい。結果、高麗はモンゴル帝国から自治権を確保し、大国際化時代を迎えることが出来、大陸の端にいながら世界を知ることが出来た。

② 伊藤先生

博多には鴻臚館（コウロカン）と呼ばれる建物があり、迎賓館として機能していた。これが１１世紀半ばに火事となり、博多津と呼ばれる那珂川と比恵川

の河口にできた砂丘の浮島に移った。この場所は外国人を隔離して管理するには最適であった。これは後の那覇港や長崎の出島、横浜の関内と類似する構造であった。この土地からは中国からの輸入品を中心に陶磁器が大量に出土していた。出土件数の多さは博多が地域のハブ港として機能していた証拠でもある。また、朝鮮の資料には、博多からの船が最も多いという記録も残っている。

③ 久芳先生

久芳先生からは、「元寇と火器の時代」をテーマに講義いただいた。宋の時代から既に火器は存在し、普及しつつあったことは驚きであり、硝石や硫黄といった資源についても大規模な輸出入があったという点では新たな気づきをいただいた。

また、この宋で誕生した震天雷（鉄砲/てつはう）は元へ伝わっただけでなく、ヨーロッパへもムスリム商人を通して伝播していった。モンゴル帝国・元の興隆においてはムスリム商人の影響力は非常に大きかったこともあり、世界の大きな潮流に触れる事が出来た。

図 18　九州大学伊都キャンパスにて　バートル先生撮影

（オ）　　九州国立博物館

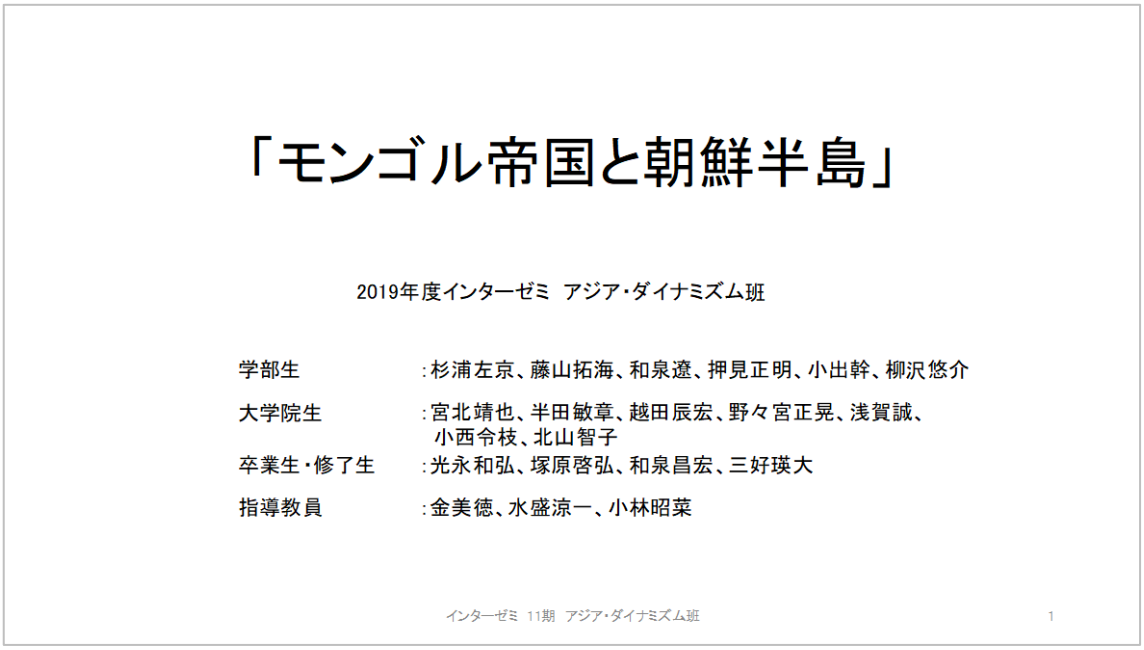
九州全土の縄文時代から現代に至る歴史的な遺物が展示されており、大きな歴史のダイナミクスを感じることが出来た。ここでも元寇時にモンゴル帝国軍が乗っていた船の錨石が展示されており、元寇が身近に感じられたとともにそれがどのように現代に続いているのか、知ることが出来た。

まとめ

今回のフィールドワークは、ちょうど台風と重なってしまい若干予定通り進まないこともあった。帰りの飛行機は飛ばず（理由は台風ではなく整備不良だが）、急遽新幹線への振り替えとなった等、様々なアクシデントに見舞われた中で、全員が無事フィールドワークを終え帰宅できたことは幸いだった。

一方、食文化も含め様々な歴史に触れ、非常に刺激となった 3 日間であった。特に「敵国降伏」の意味を知った時は衝撃であったし、3 名の高名な先生方のお話を伺えたことは何よりの価値があった。論文だけでなく、グローバル社会で生き残っていくための知恵として、今回のフィールドワークを活かしていきたいと思う。

最終発表スライド



論文目次

はじめに
第1章　高麗の政治・経済史
　第1節　高麗の国家運営
　第2節　高麗の経済
　第3節　高麗王朝の実態
　第4節　高麗王朝と儒教
　第5節　現代の朝鮮半島と日本
第2章　モンゴル帝国時代（元）の中国
　第1節　モンゴル帝国のアイデンティティ
　第2節　元朝の官僚
　第3節　元朝滅亡と白蓮教
　第4節　モンゴル帝国の都・北京
　第5節　少数民族モンゴル族による漢民族支配
第3章　モンゴル帝国以降（明・清・現代）の中国
　第1節　大清帝国における少数民族満州族の漢民族支配
　第2節　少数民族による漢民族支配～モンゴル帝国と大清帝国の共通点～
　第3節　漢民族による現代中国の多様な中華民族統治
　第4節　少数民族による統治と現代日本企業
　第5節　モンゴル帝国滅亡後の北東アジア
　第6節　清（満州人）によるモンゴル統治
　第7節　元朝滅亡後の北元時代モンゴルと中国の関係
　第8節　モンゴル帝国の統治と一帯一路政策
結論
　残された課題
最後に
フィールドワーク報告
参考文献

問題意識

1　高麗がモンゴル帝国の傘下に置かれても国が保てたのは何故なのか。

2　小国（高麗）が大国（モンゴル帝国）に相対し、生き延びるためにはどのような戦略が必要なのか。

3　大国に囲まれ生き抜いてきた高麗のアイデンティティとは、どのようなものか。

4　グローバル社会において朝鮮半島をどのように理解すべきか。

5　漢民族支配の中国と、漢民族以外（モンゴル・満州族）による支配の中国との違いはあるか。

1．モンゴル帝国史(1206-1271)

・元(1271-1368)

・北元(1368-1632) ・清(1632-1911)

11世紀～13世紀のアジア地図

13世紀のアジア～モンゴル帝国

出展：世界の歴史マップ

11世紀～13世紀のアジア地図

11世紀のアジア

12世紀のアジア

出展：世界の歴史マップ

2017年・2018年　論文の結論

2017年 モンゴル帝国のユーラシア興隆史 107ページ

モンゴル帝国が現代にもたらすもの

1. 「経済連携」による「平和と安定」
2. リーダー（チンギス・カーン）の「思想」と「視野」：イル（仲間）になる思想・多様性の受容

2018年 モンゴル帝国の興隆と衰退 244ページ

新たな発見

1. モンゴル帝国は現代にまで「ソフト面」を遺した
2. モンゴル族はアイデンティティが薄いから世界統一できた

得られた示唆

1. 歴史は繰り返す：ゆるやかな統治の限界点
2. 拡大から縮小過程の生き方：成長だけではない生き方
3. リーダーの資質：資質とガバナンスの低下

2．高麗(918年～1392年)と モンゴル帝国

高麗の知恵と失敗

通婚関係によりモンゴル王族の一員となった

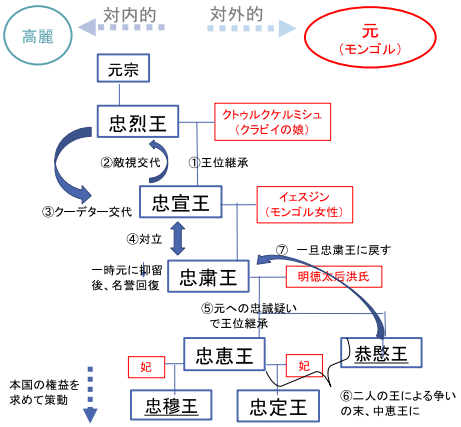
日本戦略の中で自らの存在を確立し、
支配されすぎない、主体的な立場を勝ち取った

大国に入る場合でも、自らのアイデンティティを維持するための戦略が必要で、言いなりになればよいわけではない。

内部闘争により体制が弱体化

高麗の知恵と失敗

高麗王家とモンゴル皇族の通婚関係と内部闘争



高麗の知恵

1. モンゴル（元）皇族との通婚関係により元の官職を得る
2. 対日警戒網を統括する役割を担うことで元と一体となりつつ主体性の維持
3. モンゴルの定例要求（人質・物資・軍事協力等）が軽減され、王制維持の現実化

高麗の失敗

内部闘争により、体制の弱体化へ

個々の欲や内向的な組織は持続的な体制を築けない。事が始まる時や拡大していく段階では、カリスマ要素のある個人技も必要。組織の持続的安定のためには、多様な考え方や第3者の目を入れることが必要不可欠

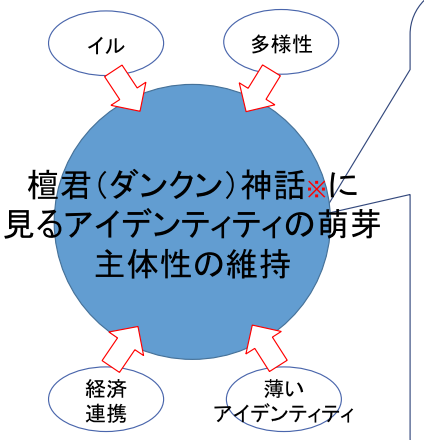
変革によるアイデンティティの確立

国外圧力の変化

今までの外圧
朝貢
度重なる侵略

元への降伏

元からの外圧
グローバル化
異文化の流入
貨幣制度
通婚
鉄
海洋インフラ



【朝鮮半島】
地域住民が中心
侵略への反発

アイデンティティ
の違い

【日本】
天皇が中心
敵国降伏※の精神

※ 敵国降伏：「敵国が我が国の優れた徳の力により、自ずからに靡き、統一される」こと
※ 檀君神話：檀君朝鮮成立時の神話と言われる。1200年前後に歴史書に登場する。

モンゴル帝国時代の中国（元）・モンゴル帝国以降の中国（明・清・現代）
～少数民族による漢民族支配の共通点～

モンゴル帝国　13世紀~14世紀

アメ：漢民族の制度や文化を尊重。
漢民族の優秀な人材を登用。

ムチ：モンゴル人支配層を頂点としたヒエラルキー。
モンゴル第一主義で漢民族を抑圧＝中国史観

大清帝国　17世紀~20世紀

アメ：漢民族への融和策
・科挙制度　・満漢併用制

ムチ：漢民族への強硬策（粛清・思想統制）
・辮髪　・文字の獄　・禁書

共通点

1．漢民族の制度・文化を尊重しながらも同化しない「アメとムチのバランス」
2．「多数派民族を統治する経験値」を元朝・清朝以前からもっていた
3．モンゴル人・満州人が支配層であることを示す「文字」（パスパ文字・満州文字）

モンゴル帝国以降の中国（明・清・現代）
～現代中国の多民族（56民族）支配・現代企業グループ経営～

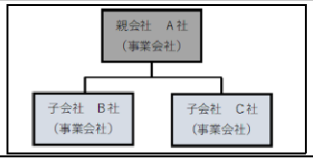
中華人民共和国　20世紀~

モンゴル帝国・大清帝国以外、歴代中国王朝は
「漢民族による儒教・漢字文化圏」を越えたことはない
⇒少数民族だからこその、しなやかな統治の成果

現代中国は、漢民族（多数派）による「漢民族による儒教・漢字文化圏」を越えた支配⇒歴史上なかった
・ウイグル、チベット問題は多様性の受容と対極

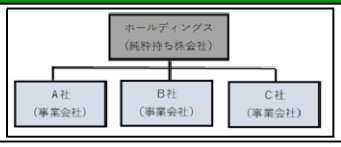
企業のグループ経営とモンゴル帝国・大清帝国

事業会社である親会社と子会社



大が小を支配・親が実権　現代中国型

持ち株会社によるグループ経営



グループ経営と個別事業の分離
「集権と分権」「遠心力と求心力」のコントロール
モンゴル帝国・大清帝国型

結論

中華帝国の統治[中華と外縁]

	東洋世界			西洋世界
～中世	東洋文明圏	東アジア世界(冊封体制)	インド	西アジア	西洋文明圏　共通善:ｱﾘｽﾄﾃﾚｽ
近世 覇権型世界秩序	中華帝国の天下観 多民族国家束ねる力学:漢民族でなく中華民族 有機的にゆるやか(ファジー)に連結 漢字文化圏:・儒教(漢字)・漢訳仏教・律令 政治圏(冊封体制):冊封体制(皇帝と首長の関係)・朝貢(君臣関係)・盟約(父子/兄弟の擬制家族関係)・互市(国際貿易)		契丹・ﾓﾝｺﾞﾙ統治:二重統治・民族融合 ⇒ 中華帝国の統治 冊封体制＝統治システム 統治者の要件＝権力者「皇帝」＋有徳者「天子」 民族の違い:漢民族 / 漢民族以外(ﾓﾝｺﾞﾙ族) 地域の違い:中心(華) / 外縁(夷) 文化の違い ※夷による中国支配の正統化:礼・義の有無 有徳で礼儀を知る人であれば漢民族でなくても天子となれる。	16世紀～大航海時代 「布教」と「植民地拡大」
近代	帝国主義と植民地化 (アジア進出、西洋価値観)			
現代	中華帝国の復興＝国家の上位にある天下システム(民族・宗教を超越した公共心)		グローバル資本主義: 米国中心＝世界の一元化	
全員参加型秩序	東洋の「共生」 ＋ 西洋の「民主・正義」 ＝ 全員参加型の「共通善」			

出所:著者作成(越田辰宏 2107年ｲﾝﾀｰｾﾞﾐ)

結論

関係国の現行政治制度

国名	政体	制度	国家元首	国会・議会
フランス	共和制	半大統領制	大統領	二院制
韓国	共和制	半大統領制	大統領	一院制
ドイツ	連邦共和制	議院内閣制	大統領	二院制
アメリカ	連邦共和制	大統領制	大統領	二院制

出所:各種資料をもとに著者作成[越田辰宏]

フランスと朝鮮（韓国）との政体比較

	フランス	朝鮮（韓国）
属国時代	対ナチス･ドイツ支配下の「ヴィシー政府」[1940–1944年] ・元首の三権統治：ファシズム体制 ・積極的協力：ユダヤ人迫害、日和見主義 ・役人社会→次政権でも地位確保	元朝支配下の「高麗」[918–1380年] 清朝支配下の「李氏朝鮮」[1392–1910年] ・事大主義(小が大に付き従う)、日和見主義 ・小中華思想 ・役人社会[両班]：支配者階級
現行体制	共和制：第五共和制 ・大統領の権限強化： ボナパルティズム気質 ・議会の権限縮小 ・役人社会：官僚政治の国家	共和制：第六共和制 ・大統領に大きな権限 ・役人社会：権力と腐敗

○支配国への積極的服従・協力（歴史の暗部）、事大主義、日和見主義
→国内政治の基盤強化目的： 忠烈王[在位1274–1308]、ﾓﾝｺﾞﾙに日本侵攻を働きかけ『高麗史』
○制度・経済政策は時代を超えて運用
→役人社会、戦後フランス共和制は、ナチス下のヴィシー政権時代の制度・経済政策を形変えて運用

出所：著者作成（越田辰宏2019）

3．フィールドワーク

フィールドワーク報告

<スケジュール>

- 8月26日(月)～8月28日(水)
  - 8月26日(月) 元寇資料館、筥崎宮
  - 8月27日(火) 福岡市博物館、九州大学伊都キャンパス講義
  - 8月28日(水) 九州国立博物館

<参加者(敬称略)>

- 合計　15人
- 学部生:杉浦、和泉(遼)、小出、柳沢、押見
- 院生:宮北、半田、浅賀、野々宮
- OB:光永、和泉(昌)、塚原
- 講師:金先生、水盛先生、バートル先生

<所感>

全日程を通して天候には恵まれず、最終日は台風の影響もあったものの、元寇の史跡などを通して歴史のダイナミズムを感じることがきた。特に、2日目の3人の先生方に講義いただけたことは、非常に勉強にもなり、とてもよい経験をさせていただけた。

フィールドワーク初日

■元寇資料館

モンゴルが来襲した「元寇」に関する資料館。2度にわたり計20万人弱の軍を動員した。

■筥崎宮(ハコザキグウ)

平安時代中期に、醍醐天皇が「敵国降伏」の宸筆を下賜され、筑前大分宮より遷座した。元寇により炎上した社殿の復興にあたり、亀山上皇も納められた。

この「敵国降伏」の意味とは、敵国を打ち負かすと言う意味ではなく、「敵国が我が国の優れた徳の力により、自ずからに靡き、統一される」ことであり、武力により天下を統一する「降伏敵国」とは意味が異なる。この神社を訪れることにより、平安の時代から続く日本の思いに感銘を受けた。

元寇資料館にて
水盛先生撮影

筥崎宮「敵国降伏」の宸筆
水盛先生撮影

フィールドワーク2日目

九州大学伊都キャンパス講義

以下の3名から講義していただくことが出来た。

■九州大学 人文科学研究院 歴史学部門 朝鮮史学講座
森平 雅彦 教授
高麗史を中心にモンゴル帝国・元との関係について

■九州大学 比較社会文化研究院 社会情報部門 歴史資料情報講座
伊藤 幸司 准教授
日本の鎌倉・室町時代の国際貿易、特に福岡の役割について

■西南学院大学　国際文化学部
久芳　崇 講師
室町・戦国時代における中国および東アジア地域の武器、特に鉄砲（てつはう）について

フィールドワーク2日目

高麗を研究する意義とは、「大国」のパワーポリティクスに対する「小国のあり方、小国論」に関するものである。

大理やウィグルは、高麗と同じようにモンゴル帝国に組み込まれて行ったが、高麗とは異なり国家の枠組み自体がなくなってしまった。

また、博多から見たアジア、武器という観点からもお話いただいた。

バートル先生撮影

4. 研究計画

研究計画

文献研究とフィールドワークによる探究型学習により実施

2019年秋学期インターゼミ・アジアダイナミズム班 年間スケジュール

【メンバー】21名(うち教員3名) ①学部6名(杉浦、藤山、小出、和泉(澄)、押見、柳沢) ②院生8名(宮北、半田、越田、小西、北山、野々宮、山崎、浅賀)
③卒業生・修了生4名(光永・塚原・和泉(昌)、三好) ④教員3名(金先生・水盛先生・小林先生)
【担当】リーダー(宮北)、副リーダー(半田、杉浦)、議事録:輪番、スケジュール管理(宮北)

	月	日	議 題	文献調査	フィールドワークFW	備 考	議事録
1		13	初回学長挨拶				宮北
2	4月	20	自己紹介・班編対				宮北
3		27	テーマ方向性	次回ベース文献探索など報告	FW訪問先決定		宮北
4		11	分担発表	次回ベース文献収集など報告		年間スケジュール	宮北
5	5月	18	分担発表	文献集約・目次	FW訪問先決定		藤山
6		25	分担発表	文献集約・目次			小出
7		1	分担発表				和泉(澄)
8		8	仮研究計画中間発表1日目	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク		○○時集合	—
9	6月	15	仮研究計画中間発表2日目	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク		○○時集合	—
10		22	研究計画発表反省				柳沢
11		29	箱根合宿発表目次立て	中間発表に向けた討論			推長
12		6	分担発表				野々宮
13		13	分担発表				半田
14		20	箱根合宿発表PPT確認				山崎
	7月		7/31(水)-8/1(木) 夏合宿(箱根)中間発表 合宿先: 箱根水明荘(箱根町湯本702) TEL.0460-85-5381(代) http://www.suimeisou.com/access/index.htm	●発表者(役割分担):1研究概要、2目次、3 内容、4参考文献・研究計画・FW (連絡:学長室 高野takano@tama.ac.jp)			—
	8月						—
		下旬	8月26-28日 福岡フィールドワーク	福岡を中心に、九州大学など訪問			—

研究計画

15	9月	21					光永
16		28	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			杉浦
17	10月	5	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			小西
18		12	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			北山
19		19	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			塚原
20		26	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)			和泉(昌)
21	11月	2	PPT目次レビュー/分担確認	各自完成版を持ち寄る			宮北
		9	講義なし(学園祭)			多摩大学学祭	
22		16	PPT目次レビュー/分担確認	全体を印刷して確認			半田
		23	講義なし				
23		30	PPTレビュー				堀沢
24	12月	7	PPTレビュー				押見
25		14	アクティブラーニング(AL)祭	アクティブラーニング(AL)祭 (多摩キャンパス?)			
26		21	論文発表				宮北
27		23	論文提出日			メールで送付する期限	
28	1月	5	講義なし(冬期休業日)				
		11	2019年度最終講義				
29		18	センター試験(講義なし)				
30		25	論文提出/懇親会(年度最終日)	最終論文(完成版)提出日			

授業回数 計30回(前期:14回 後期:13回)

5. 参考論文/文献

参考文献〈書籍〉

〈論文〉5本

1. 寺島実郎『大中華圏とモンゴル、その世界史へのインパクト』(『世界』第907号(2018年5月号)、岩波書店,2018)
2. 岡田英弘『世界史の中の大清帝国』(岡田英弘編『清朝とは何か』,2009)
3. 金 貴東『歴史・文化・産業都市の開城』(日本貿易振興機構アジア経済研究所『アジ研ワールド・トレンド』第236号、特集「朝鮮半島の都市」,2015)
4. 佐立治人『元朝の立法・刑罰・裁判』(関西大学法学論集,2016)
5. みずほコーポレート銀行『Mizuho Industry Focus vol.89 純粋持ち株　会社体制におけるグループ経営上の落とし穴』(,2010)

〈著書〉76冊

1. 寺島実郎『寺島実郎の時代認識資料集　2019年夏号』(寺島実郎事務所,2019)
2. 寺島実郎・渡辺利夫・朱建栄『大中華圏―その実像と虚像』(岩波書店,2004)
3. 寺島実郎『大中華圏―ネットワーク型世界観から中国の本質に迫る』(NHK出版,2012)
4. 麻生川静男『本当に悲惨な朝鮮史』(KADOKAWA,2017)
5. 愛宕松男・寺田隆信『モンゴルと大明帝国』(講談社,1998)
6. 尹 龍爀『韓国における最近の三別抄遺跡の調査と研究』(韓国研究センター年報 第13号,2015)
7. 井上秀雄『古代朝鮮』(日本放送出版協会,1972)
8. 宇山卓栄『朝鮮属国史　中国が支配した2000年』(扶桑社,2018)
9. 岡洋樹、境田清隆、佐々木史郎編『東北アジア』(朝倉世界地理講座　第2巻,2009)
10. 岡洋樹『清代モンゴル盟旗制度の研究』(東洋書店,2007)
11. 岡田英弘『モンゴル帝国の興亡』(ちくま書房,2001)
12. 岡田英弘『世界史の誕生』(筑摩書房,1992)
13. 岡田英弘『世界史の誕生―モンゴルの発展と伝統』(ちくま文庫,1999)
14. 岡田英弘『読む年表 中国の歴史』(ワック,2015)
15. 岡本隆司『世界のなかの日清韓関係史 後輩と属国、自主と独立』(講談社,2008)
16. 岡本顯實『元寇：世界帝国が攻めてきた．国難。神風は吹いたか？』(さわらび社,2013)
17. 沖大幹他『SDGsの基礎』(事業構想大学出版部,2019)

参考文献〈書籍〉

18. 小長谷有紀 著『モンゴル』(『暮らしがわかるアジア読本』河出書房新社,1997)
19. 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』(朝日新聞社,1996)
20. 小和田泰経『朝鮮王朝史』(新紀元社,2013)
21. 金岡秀郎『モンゴルを知るための60章』(「エリアスタディーズ」第4巻、明石書店,2000)
22. 河上麻由子『古代日中関係史』(中央公論新社中公新書,2019)
23. 姜在彦『歴史物語　朝鮮半島』(朝日新聞出版、朝日選書,2012)
24. 関係を考える手がかりとして』(神戸大学会議発表論文,2004)
25. 高秉雲・鄭晋和共編『第3版『朝鮮史年表―前60万年-1991年12月まで』』(雄山閣出版,1992)
26. 高秉雲・鄭晋和共編『朝鮮史年表』(雄山閣出版,1979)
27. 国際時事アナリスツ編『日本人のための朝鮮半島の歴史』(河出書房新社,2018)
28. 事業構想大学出版部『FACTFULNESS』(日経BP社,2019)
29. 芝山豊、岡田和行編『モンゴル文学への誘い』(明石書店,2003)
30. 斯波義信『中国都市史』(東京大学出版会,2002)
31. Jean-Paul ROUX(ルー)『Gengis Khan etl'Empire mongol. PARIS』(Gallimard,2002)
32. ジャン・ポール・ルー著　杉山正明訳『チンギス・カンとモンゴル帝国』(創元社,2003)
33. John Robert Seely『英国膨張史論』(平凡社,1930)
34. 白石典之『モンゴル帝国誕生―チンギス・カンの都を掘る』(講談社、講談社選書メチエ,2017)
35. 菅沼晃『モンゴル仏教紀行』(春秋社,2004)
36. 杉山正明・弓場紀知・宮紀子・宇野伸浩・赤坂恒明・四日市康博・橋本雄『モンゴル帝国』(「NHKスペシャル文明の道」第5巻、NHK出版,2004)
37. 杉山正明『クビライの挑戦』(講談社,2010)
38. 杉山正明『クビライの挑戦―モンゴルによる世界史の大転回』(講談社、講談社学術文庫,2010)
39. 杉山正明『クビライの挑戦―モンゴル海上帝国への道』(朝日新聞社、朝日選書,1995)
40. 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』(『興亡の世界史』第9巻、講談社,2008)
41. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡<上>「軍事拡大の時代」』(講談社、講談社現代新書,1996)
42. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡<下>「世界経営の時代」』(講談社、講談社現代新書,1996)
43. 杉山正明『ユーラシアの東西――中東・アフガニスタン・中国・ロシアそして日本』(日本経済新聞出版社,2010)
44. 杉山正明『興亡の世界史 モンゴル帝国と長いその後』(講談社,2016)
45. 杉山正明『大モンゴルの世界―陸と海の巨大帝国』(角川書店,1992)
46. 杉山正明『大モンゴルの世界―陸と海の巨大帝国　改訂版』(角川ソフィア文庫,2014)
47. 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』(講談社学術文庫,2016)
48. 杉山正明『耶律楚材とその時代』(白帝社,1996)
49. 杉山正明他『大モンゴルの時代』(中央公論社,1997)

参考文献〈書籍〉

50. 田村実造『中国文明の歴史〈7〉大モンゴル帝国』(中公文庫,2000)
51. 張東翼『モンゴル帝国期の北東アジア』(汲古書院,2016)
52. 鄭晋和『朝鮮史年表』(雄山閣,1992)
53. David O. MORGAN『The Mongols,Hoboken,』(NEW JERSEY,2007)
54. デイヴィド・モーガン『モンゴル帝国の歴史』(角川選書,1993)
55. 東北亜歴史財団編、監訳者田中俊明、訳者篠原啓方『高句麗の政治と社会』(明石書店,2012)
56. 冨谷至・森田憲司『概説中国史 下−近世−近現代』(昭和堂,2016)
57. ハイシッヒ著、田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』(岩波書店,2000)
58. 羽田正編『海から見た歴史』(東京大学出版会,2013)
59. 藤田昇、加藤聡史、草野栄一、寺田良介編著『モンゴル―草原生態系ネットワークの崩壊と再生』(京都大学学術出版会,2013)
60. 風戸真理『現代モンゴル遊牧民の民族誌―ポスト社会主義を生きる』(世界思想社,2009)
61. 松川 節『図説 モンゴル歴史紀行』(河出書房新社,1998)
62. 間野英二他『地域からの世界史―第6巻　内陸アジア―』(朝日新聞,1992)
63. 水谷健彦『急成長企業を襲う7つの罠』((株)ディスカヴァー・トゥエンティワン,2014)
64. 宮脇淳子『モンゴルの歴史―遊牧民の誕生からモンゴル国まで』(刀水書房、刀水歴史全書、第59巻,2002)
65. 森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』(株式会社山川出版社,2016)
66. 森平雅彦『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』(「世界史リブレット」第99巻、山川出版社,2011)
67. 森平雅彦『モンゴル覇権下の高麗―帝国秩序と王国の対応―』(名古屋大学出版会,2013)
68. 山本光朗『耶律楚材と中書省について』(北海道教育大学、人文科学・社会科学編,2016)
69. 劉孝鐘(ユ・ヒョヂョン)、ボルジギン・ブレンサイン『境界に生きるモンゴル世界―20 世紀における民族と国家』(八月書館,2009)
70. 楊　海英『逆転の大中国史　ユーラシアの視点から』(文藝春秋,2016)
71. 李玉著、金容権訳『朝鮮史』(白水社,2008)
72. Robert O. Paxton 訳 渡辺和行、剣持久木『ヴィシー時代のフランス　対独協力と国民革命1940−1944』(柏書房,2004)
73. ロバート・マーシャル『図説 モンゴル帝国の戦い―騎馬民族の世界制覇―』(東洋書林,2001)
74. 早稲田大学モンゴル研究所『モンゴル史研究―現状と展望』(明石書店,2011)
75. 渡辺和行『ナチ占領下のフランス 沈黙・抵抗・協力』(講談社,1994)
76. Walther HEISSIG(ハイシッヒ)『Ein Volk　sucht seine Geschichte : die Mongolen und die verlorenen Dokumente ihrer großen　Zeit. Düsseldorf』(Econ Verlag,1964)

ご清聴ありがとうございました

高麗年表（918年～1235年）

高麗	中国・モンゴル帝国	日本
918年 王権 弓裔を殺し、高麗建国		
935年 新羅を征服		
936年 後百済を征服		
	946年 後晋、大契丹国により滅亡。開封にて国号を大遼に改める	941年 天慶の乱
983年 契丹、高麗を攻める		
985年 契丹、高麗を攻める		
	1004年 澶淵の盟	
1010年 第2次契丹（遼）の侵入 高麗軍は首都開城を明け渡す		
1015年 遼の侵略		
1018年 後渤海国滅亡 遼を一時撃退		
1020年 高麗と遼の間に講和、朝貢 遼の分暦		1017年 藤原道長太政大臣となる
1022年 契丹の正朔を奉じる。再び契丹に服属		
		1028年 平忠常の乱
		1098年 源義家、昇殿を許される
	1115年 金を建てる。	
	1125年 遼、金により滅亡	
	1126年 靖康の変で宋滅亡	
1145年 朝鮮史書「三国史記」が完成		1156年 保元の乱
	1205年 チンギス=カーンのモンゴル帝国、西夏に侵攻開始	1184年 源頼朝、鎌倉に公文所・問注所を置く
	1211年 モンゴル帝国、金に侵攻開始	1192年 頼朝、征夷大将軍に任ぜられ、鎌倉に幕府を開く（鎌倉幕府）
1218年 モンゴル帝国と同盟	1214年 金、モンゴル帝国の圧迫により中都（北京）から開封に遷都	
1225年 鴨緑江事件 モンゴルと断交して対立する（→モンゴルの高麗侵攻）	1227年 西夏滅亡 チンギス=カーン死去	1221年 承久の乱
1231年 蒙古（後の元）の侵入が始まる。（第1次高麗侵入）		
1232年 蒙古軍第2次高麗侵入	1232年 三峰山の戦い	1232年 御成敗式目（貞永式目）を制定する
1234年 蒙古軍第3次高麗侵入	1234年 金滅亡	
1235年 蒙古軍第4次高麗侵入		

高麗年表（1238年～1392年）

高麗	中国・モンゴル帝国	日本
1238年 蒙古軍第5次高麗侵入		
1247年 高麗、モンゴルへの貢納をやめる	1253年 雲南の大理国、モンゴル帝国に降伏	1247年 宝治合戦
1254年 蒙古軍第6次侵入	1257年 ベトナムの陳朝、モンゴル帝国に降伏	
1258年 蒙古へ降伏		
1259年 モンゴル（クビライ政権）に服属。		
1270年 高麗「慈悲嶺」以北の広大な東寧路を奪われる。		1268年 北条時宗が執権に就く
1271年 忠烈王クビライの皇女、忽都魯揭里迷失（クトゥルク=クルミシュ）と婚姻の許諾を得る	1271年 モンゴル帝国のクビライ、国号を大元に改める。首都大都	
1272年 忠烈王 クビライに日本侵略を提言。軍船の造船を申し出る		
1274年 日本侵略のため、戦艦大小九百艘を造船する。	1274年 元、日本に遠征し失敗	1274年 文永の役
	1276年 元のバヤンにより南宋滅亡	
	1279年 崖山の戦い	
	1281年 元、再び日本に遠征し失敗	1281年 弘安の役
	1282年 チャンパ王国、元に降伏	
	1284年 元、再びチャンパ王国に遠征。その後、チャンパ、陳朝連合軍の抵抗により敗退	
1287年 元、高麗に征東行省を設立(後期征東行省)高麗王を長官に任命		1285年 霜月騒動
		1290年 浅原事件
1297年 クビライの娘忽都魯揭里迷失死去。元との関係が壊れる	1292年 シンガサリ王国に遠征	
		1293年 平禅門の乱。鎌倉大地震
	1294年 クビライ=カーン死去	
1392年 高麗が滅びる		1305年 嘉元の乱
	1361年 朱元璋が南京で大明を建てる	

謝辞

最後に、本論文を作成するにあたり、インターゼミ主宰の寺島実郎学長を始めとする多くの先生方、卒業生より、毎回のゼミにおいて高い視座と広い視野から多くの助言を頂きました。

アジアダイナミズム班の指導教員である金美徳教授、水盛涼一准教授、小林昭菜専任講師にはテーマ設定から文献研究、フィールドワーク、論文執筆に至るまでの研究の大きな指針と共に、高麗史・モンゴル帝国史から見る世界史、グローバル・ヒストリーから紐解く現代的意義、 現代の私たちが持つべき視座について、大胆且つきめ細かい指導を頂きました。

今年 2019 年度は、福岡を中心にフィールドワークで訪れることができました。九州大学 森平昌彦教授をはじめ、九州大学 伊藤幸司准教授、西南学院大学 久芳崇講師にはそれぞれの研究からの深い知見、発見、見解を惜しみなく教示頂き、文献研究だけでは得られない歴史的背景を教示頂きました。

この場を借りて、本論文を執筆するにあたりご協力頂いた全ての皆さまに感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

2020 年 1 月 25 日

多摩大学インターゼミ アジアダイナミズム班一同

執筆担当

はじめに	半田敏章
第１章	
第１節	半田敏章
第２節	和泉昌宏
第３節	宮北靖也
第４節	宮北靖也、半田敏章
第５節	宮北靖也
第２章	
第１節	塚原啓弘
第２節	小出幹
第３節	杉浦左京、柳沢悠介
第４節	光永和弘
第３章	
第１節	光永和弘
第２節	光永和弘
第３節	光永和弘
第４節	光永和弘
第５節	三好瑛太
第６節	小西令枝
第７節	北山智子
結論	越田辰宏
最後に	宮北靖也
参考文献	北山智子
年間スケジュール	宮北靖也
フィールドワーク報告	宮北靖也